

中国60年代と世界

第2期第5号(通巻第12号) 2017.12.16

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1)/コメント…森瑞枝(3)/今後の研究会予定(3)/12月例会要旨:知其不可为而为之…傅国涌(4)/傅国涌の仕事…土屋昌明(7)/荒牧万佐行さん文革写真集出版記念会(12)/資料:延安各界のスターリン六十歳誕生日祝賀大会における講話…毛沢東(13)/忘却を拒絶する:ある世代の歴史的責任…銭理群(15)/張先痴のドキュメンタリー上映活動参加記…王瑄(19)/中国現代史構築の素材発掘…矢吹晋(22)/『林昭の魂を探して』字幕(その4)…土屋昌明編訳(23)

例会報告(10月26日)

日本の文革研究の回顧と新成果から研究のあり方を考える

2017年10月26日(木)午後7時から専修大学神田校舎51教室にて、本研究会10月例会として、福岡愛子氏が「文革研究の対象と方法 論点整理と見取り図構想の試み」と題する研究発表をおこなった(以下、敬称略)。参加者は、矢吹・朝・森・島本・土屋。

発表者は、1965～66年の文化大革命発生期から1976～80年前後の文革終息期に日本・アメリカ・中国で発行された新聞・雑誌などを調査し、文革に関する言説にどのような種類と時間的変容があったかを考察した。とくに、日本国内の新聞・雑誌などに発表された言論に対しては、網羅的に調査をしたごとくであり、驚くべき時間と労力をかけている。本発表の考察対象は大きく4部に分かれていた。第一は、文革の発端と性格付けに関する言論。第二は、1980年代の文革研究。第三に、1990年代以降、質的变化を模索した研究。第四に、最近の社会学的現地調査を踏まえた研究。

第一部では、日本での文革の受け取りかたが端的にわかる言論として、おもに二つの問題が詳しく調査された。一つは、文革の発端をいつに設定したかについて。発表者によれば、1965年11月10日に上海の『文匯報』に姚文元の呉晗批判『「海瑞免官」を論ず』が掲載されたことをもって文革の発端だと認識した言論が多かったことがわかった。1966年5月16日の党中央の「通知」、党中央文革小組の設置や、5月25日の聶元梓の大字報、あるいは8月8日「プロレタリア文化大革命に関する決定」などを、文革の発端とする言論は少なかった。

もう一つの問題は、文革の性格規定である。発表者によれば、日本の同時代の言論を追っていくと、

文革の性格規定にバラツキがあると同時に、文革に特徴的な点がむしろ着目されていなかったようなのである。たとえば、現存の世界秩序や20世紀の文明社会への挑戦、反近代主義、あるいは革命的人間像の形成、七億の人民の心の革命、世界史上初の大衆的・全人民的精神革命、さらに世界革命への道、国家と階級の死滅、などという米ソ体制や近代主義の超克、あるいは「魂の革命」というような理念に着目した性格規定は、むしろ少数だった。それより、経済や軍事上の路線闘争や二つの路線をめぐる階級闘争、党内権力闘争が革命・思想改造運動として推進されたもの、などと規定する言論が多かった。

第二部は、第一次天安門事件を解釈する地点から文革を再度考え直そうとする動向である。発表者が強調したのは、加々美光行『資料中国文化大革命:出身血統主義をめぐる論争』(1980年)であった。加々美は、天安門事件における民衆と国家のかかわりを文革の中に検出し、遇羅克という学徒労働者に着目して、単なる政治的な変革ではなく、中国人の「血統主義的情念」を変更するところに文革の価値を見いだそうと考えた。加々美はさらに『現代中国のゆくえ:中国文化大革命の省察II』(1986年)で「反近代精神」の発揚と敗北を提示した。この考えは、その後も彼の文革観の基調となり、『歴史のなかの中国文化大革命』(2001年)でも、毛沢東中国が「近代批判」の道を歩んでいたことを強調している。

発表者は、中共の歴史決議による性格規定と認識枠組が日本の研究にも使われた点を指摘した。安藤・太田・辻『文化大革命と現代中国』(1986年)は、文革の理論や目的のご都合主義を批判、すべての観

点から文革は失敗だったとする。加々美とは異なり、コミュニケーション理念も不在、物的近代化の道を拒否しているかに見えながら、革命的・高度成長への期待は常に存在していたという。

発表者は、80年代の民主化の流れを文革に求める議論もおこったことも指摘した。矢吹晋『文化大革命』（1989年）は、文革のなかから社会主義への根底的な懐疑が生まれ、民主化の種子が撒かれ、中国の近代化を根本的に再考する契機が与えられたとみる。

その他の特徴として、文革研究に「パワー・ポリティックス・アプローチ」がおこなわれるようになった点も発表者は指摘した。それは、発表者によれば、文革の構造的・相関論的アプローチであり、社会・経済的構造／政治的構造／思想的構造と最高指導者／地方指導者／基層指導者／大衆各層、それぞれの共鳴・増幅・軋轢・反作用の相関性に着目する方法である。

第三部では、1990年代の欧米における研究の質的転換として、「記憶」研究の重視について指摘した。たとえば1996年7月「回想の文化大革命」（A.ウォルダー主宰の学会、香港理工大学）、1999年3月「記憶の想起、書き直し、知の位置づけ——ポスト毛沢東の中国における記憶の政治学」、2001年3月「現代中国の記憶とメディア」（UCバークレー・中国研究センター）、2002年 David Davies “Remembering Red: Memory and Nostalgia for the Cultural Revolution in Late 1990's China”、2006年2月「文化大革命の歴史は可能か？」（ワシントン大学での学会）などである。

この点について討論では、文革経験者の高齢化と現代史の重要性の認識、オーラルヒストリーの重視（とくに中国国内における「口述史」の普及）、インディペンデント・ドキュメンタリーの隆盛などが関連しているだろうという意見がでた。

発表者によれば、記憶の重視には、ポスト・コロニアリズムからのインスパイアがある。つまり、植民地の歴史は、現在から切り離せるものではなく、文化やアイデンティティ・言語にまで及び、植民された側の人々の現在を規定しているものだ。植民地からより一般的に考察が進み、抑圧された社会にお

ける個人的な体験や記憶の見直し、口述資料の再評価がおこなわれたという。発表者はみずからの研究をこの流れに位置づけた（『文化大革命の記憶と忘却』2008年）。その研究で採りあげられた回想録には、文革封印という現在への対抗となるような、記憶の語りの多様化・複雑化、文革の真実というステロタイプ化に対抗するような多元的現実が描かれている。また、文革出版物の困難が国家と個人のやりとりを生じさせるという側面もあるという。

文革出版物の困難は、学位論文による成果発表という方向にも発展したという。たとえば、葛慧芬『文化大革命を生きた紅衛兵世代』（1999年）・汪曉華「中国の「文化大革命」期の服飾文化」（2002年）・劉松「中国の政治体制と文化大革命：文化大革命の目的を中心に」（2003年）・楊麗君「文化大革命と中国の社会構造」（2003年）・辺静「中国の歴史変動と「共和国同代人」のライフコース：文化大革命期の子どもたち」（2009年）が紹介された。

第四部は、特定領域への社会学的調査、すなわち地方史料や檔案・聞き取り調査に基づいて、ある領域における文革の現実の実証研究が進んだこと、次のような例が紹介された。金野純『現代中国の社会変容と集合行為：上海の労働現場と文化大革命 1949-69』（2006年）は上海の労働者、楊海英『墓碑なき草原』（2009年）は内モンゴルでの文革の現実、谷川真一『中国文化大革命のダイナミクス』（2011年）は陝西省の農村での現実などを扱っている。発表者によれば、これらの研究では、従来知られていなかった多くの新たな知見が示されている。たとえば、文革時期の暴力の凄惨さは、革命委員会樹立の過程や軍の介入によっておこっていたことや、宗族や民兵による、地方の共同体の具体的状況による暴力の相違などが判明したという。発表者によれば、これは文革の暴力の解釈モデルを国家から共同体へと変更したといえる。また、対立したグループの抗争より、独裁体制下の残虐行為のほうが無軌道な暴力がおこなわれ、それが文革のイメージを形成させていたこともわかった。それを実証したのがA.ウォルダーの研究で、武闘のピークは1967年7月だが、死者数は1968年7月が最高だという。

ほかに、アメリカの文革研究チームについて簡単

な紹介があり、有益だったが、文革の研究そのものからは若干離れるので、本稿では触れないことにする。

最後に、近年の成果をめぐる研究方法の問題点が指摘された。第一に、社会学的な統計データから性急に結論する傾向。第二に、これまでの文革研究を無視する傾向。第三に、日本の研究を特殊な色彩を帯びているとみる傾向。第四に、当事者性の問題。発表者は、谷川真一が述べた「今日、大半の研究者は、文革が理想のために行われたとは考えていない」という観測を例示した（谷川真一「中国文化大革命 50 周年 その「理想」と現実」『世界』2016 年 8 月号）。発表者は、この観測にある種の疑念を感じたようだ。ウォルダールの実証研究の動機に触れて、「そのような事態を生き抜いた人々にとっての衝撃の大きさは、いかばかりだったか」という驚きと恐れがあったと指摘し、実証研究の裏側に研究者の当事者性があることを強調した。研究者がもちうるこのような当事者性を、発表者は重視している。

（土屋昌明）

「当事者性」を喪うな

森瑞枝

私はかなり前から、社会学という分野に関心を持ってなくなっていて、さらには実証史学も、もういい

か、という気がしてきている。なにかを実証したところで、しょせん今現在の目線、現状解説ではないかと。情報収集も解析も早晚、人工知能が上手にこなすだろう。

こんな感想はもちろん、業績（情報）の洪水についてゆけない、処理能力の低い自分の知的怠慢の言い訳ではあるが、たぶん、研究者の「当事者性の問題」と関わっている。この五十年の文革情報、研究の歩みを振り返る福岡氏の報告から、文革のはらむ問題が、いかに矮小化されてきたかに気づかされた。

文革の発動を、世界中が世界史的な事件と受け取っていた。日本における文革への関心も、自分たちと同じ世界の新局面だという当事者性と深く関わって始まった。しかし、やがて当事者性は振り捨てられてゆき、文革研究は特殊な中国の特殊な政局研究となりました。一方、中国では、世界史の当事者として文革に関わったことを忘れず、歴史（政局）の部外者（被害者）として整頓されるのを拒絶して、文革を記憶し表現する新しい方法を開発している人々がいる。中国人は文革の当事者で、日本人は部外者（野次馬）だから仕方がない、と納得したら、「1パーセント連中」の思う壺である。

当事者性を手放さない社会学がありうる、その可能性の豊かさを教えていただいた。

今後の研究会予定

2 月例会

2 月 22 日（木）午後 7 時～ 専修大学神田校舎（教室未定）

土屋昌明「2017 年度の研究成果と今後の展望」

話題沸騰の新作！ 半世紀前の人民中国——北京・上海・広州・深圳・武漢

1967 中国文化大革命 荒牧万佐行写真集

2017 年 11 月 22 日発行、B5 判 216 ページ、著者…荒牧万佐行、編集協力・解説…前田年昭、装丁…鈴木一誌
発行…集広舎（電話 092-271-3767、FAX092-272-2946）、定価（本体 2500 円＋税）、ISBN978-4-904213-54-4

街には文字が溢れ、通りには人々が溢れかえっていた！

毛沢東が待ったをかけた上海コミュン（上海人民公社）成立（1967 年 2 月 5 日）、その 1 週間前という歴史的瞬間を目撃した日本人カメラマン（一連の文革報道で 1967 年日本写真協会新人賞受賞）がいた！

目次紹介 第 1 章 街は巨大な掲示板になった／第 2 章 議論を尽くし、社会と自己を改造する／第 3 章 ひたすら歩く／第 4 章 群れる、好奇心／第 5 章 労働は権利だ／第 6 章 天の半分／第 7 章 生活の中の革命

12月例会（2017年12月16日）发表要旨

知其不可为而为之——彭令昭与《星火》在精神史上的意义（提纲）

傅国涌

开篇

- 1、大饥荒没有像样的反抗：
- 1、杨继绳在《墓碑》中说，陕西兴平县、宝鸡市和西安市雁塔区 1960 年 116 起“反动”标语和信件，50% 针对粮食问题；
- 2、1958—1962 年，在云南、贵州、四川、青海、甘肃等地有小规模暴动，有许多是因饥饿。1960 年 6 月，贵州江口县 10 万人中饿死 4 万人，带头暴动的是公社书记，孩子也饿死了，开仓放粮的县长开枪自尽，虚报粮食产量激起民变的县委书记投河自杀。
- 3、边民外逃【西南边境、广东深圳、新疆伊犁】
- 4、哄抢粮食；
- 5、刑事案件增多【偷盗抢劫】
- 6、高王凌《人民公社时期农民“反行为”调查》：钻空子、弄虚作假、做贼娃子活路【偷】等。
冯客《毛泽东的大饥荒：1958—1962 年的中国浩劫史》概括为：上欺下骗、小偷小摸、铤而走险、背井离乡……
- 2、疑问：何方《从延安一路走来的反思》：
从小要饭、善良的袁大娘问：“毛主席为什么那么心狠，就是不让老百姓吃饱饭？”【中共党史《毛泽东生活档案》1961 年 4 月 26 日菜谱：七大西餐系列，鸡鸭肉特别是鱼虾上百种，单是鸡就有 14 种。】

《星火》一群

- 1、兰大右派学生群【1959 年 5 月——1960 年 1 月】
张春元、孙和、顾雁、苗庆久、胡晓愚、向承鉴、谭蝉雪
突破“兰大——知识分子——甘肃”的圈子——《星火》【顾雁提议，1959 年 12 月底】
油印刊物《星火》：和平、民主的社会主义，一个使工农劳苦大众幸福、人人平等、自由的社会

2、串珠子

甘肃——全国

天水——武山

彭令昭【上海 1959 年 10 月】、梁炎武【广州】、徐长昆【天津】、

杜映华、罗秉志【武山 1960 年 5 月】

把武山与天水连接在一起并进行组织的是孙和

3、分歧和讨论【1960 年 1 月—5 月】

1、组织：中国共产党革命（或革新委员会）、中国共产主义者联盟、中国民主劳动农工同盟

正式提出讨论是在 1960 年 5 月以后，此前采纳了彭令昭的意见，只求有实，不求有名，不应过早搭起一个空架子，徒有虚名而无其实，树大容易招风，有无名称都不妨碍实际工作的进行和发展。【向 承鉴认为名不正则言不顺】

2、纲领（草案）、宣言：1960 年 4 月在上海张、顾、苗三人讨论：当前形势、革命的动力、革命的目的、现阶段具体政策和路线【顾、苗分头起草】

3、联络：

（1）武山以苗庆久、向承鉴为中心、天水以张春元、胡晓愚为中心，上海以孤雁为中心，彭令昭负责联系北大，向承鉴负责对杜、罗的联系；

（2）收集全国各地领导干部名单；

（3）国外联络：谭蝉雪去香港

4、《论人民公社》三百多份

4、《星火》一群的精神史意义

1、两个古神话：夸父逐日、精卫填海彰显了知其不可为而为之的精神。

2、长期被遮蔽，不大为人知。

3、在没有反抗的时代提供了具有精神质地的反抗个案。

4、牵涉之广、牺牲之惨烈，尤其当中个别人所达到的思想高度都足以给这个民族一点安慰。

5、思想资源

- 1、毛选：《星星之火可以燎原》、《放弃幻想，准备战斗》《目前形势及我们的任务》等。
- 2、红色教科书和《人民日报》的话语体系：“科学社会主义”、“右倾机会主义”、当前形势、革命的动力、革命的目的、在现阶段具体政策和路线等
- 3、《南斯拉夫共产主义联盟纲领（草案）》
- 4、与兰大右派学生群不同，彭令昭读过《世界各国国民运动史》《中国政治思想史》等，对西方文学和中国古典文学有更深入的理解。

《星火》案

- 1、1960 年 5 月，谭蝉雪在广东被捕
- 2、1960 年 7 月，张春元在广东被捕
- 3、1960 年 9 月，天水、武山大搜捕，武山有 33 人被捕。
- 4、1960 年 10 月，顾雁、彭令昭在上海、苏州被捕，兰大右派老师徐长昆在天津、北大老师梁炎武在广州被捕。
- 5、1962 年 1 月，杜映华等人在武山被捕。
- 6、逮捕 43 人，判刑 25 人（从三年到无期不等），另有 3 人管制、2 人戴帽处理、13 人无罪释放，其中枪决 3 人【彭令昭 1968 年 4 月 29 日枪决，张春元（1932 年 11 月 15 日生），1970 年 3 月枪决，杜映华 1927 年生，1970 年 3 月枪决】，他们中有大学老师 2 人、研究生 1 人、大学生 12 人、干部 3 人、农民 7 人。
- 7、彭令昭狱中反思和她的诗：

- 1、《个人思想历程的回顾与检查》，一九六一年十月十四日：

秉承着北大以及“广场”传统的影响，我很重视对外地、外校的联系。因为从北大以及京城的情况，使我坚定地相信：“天涯何处无芳草”？时代思潮如是一种超越空间的存在，更不如说作为一个“阶级”的这些人本身之间便有着深刻的共性，散珠子遍地是，就看会不会拾，小珠串也一定有，找到一些沟通起来，戏就有得好唱……顾雁他们本来早已邀我上西北玩儿一回，我苦于没法脱身，也怕引起注意。以后他也身体不佳回南了，这便很巧。通过接触，很快沟通了、交流了北大与兰大反右以来的一般情况。

……从主观上来说，我是代表“广场”去考虑某些问题的，自然也没谁们封我当这代表，但也可以说有。在“广场”后期直到主要负责人被捕前后，人们一般都怀着这样的默契：独立存在、独立作战，无论在什么环境下不负初愿，不改初志！要像液态的汞那样，聚到一起立刻能混合无间，拍散了，不论是多细的一颗也独立成珠！——组织上是否正式参加倒又次要了，精神一致，自必呼吸相通，……故从这方面说，我又很有资格为“广场”的当然代表，犹如其他“广场”友人们的资格一样。对着顾雁我没很强调这一点，一来因为暂时尚无强调的实际需要，二来，他也是北大出身的，总还有相当强烈的“北大观念”、不烦十分强调。另一方面，我当然也同时代表自己个人，想起来，兰大的伙伴们大致会了解我这种身份。代表“广场”的意义并非是颐指气使、发号施令，而是作为平等的联合……“广场”是不可扼杀的，它活在我们每一个与它有直接关系和密切联系的人们身上！

大约黄土高原上比之金碧辉煌的北京城内是辽阔而且强悍，兰大的朋友们性格相当开朗而外向，好动作，却不甚好静去深思。这当然与客观环境有很大关系。似这种好动的习性用以造反，长处是颇富于进取，短处是不善于等待……有些事，北京的人们若真蓄意要做，未尝做不起来，如印些小东西之类。不过我对此可谓是一向反对的，理由很简单，印秘密宣传品，不仅对印的人来说是个冒险，对一切读的人来说同样是个冒险。真要做哩，非但得为自己想，还得为别人想：一份或一张东西出去，能给人家一点什么？值不值得别人冒着险看？倘然不过是些尽人皆知的道理，秘密传单也不足奇，倒使别人冒没有价值的险。自己倒罢了，既干了这个，就不好太畏首畏尾。但也该较计较计，值得才干，不值得便不干。可是我这种主张曾受到过误解，使得我相当生气！——已经走到了这么一步，难不成我还惜此一身么？

不过有些东西依我看来是没啥意思。在分局，很早，承办员就问到过我关于顾雁印了“海鸥”的事。我叫先不知道，只好由着生米煮成熟饭，若早知道，决不同意！——不用

说别的，就作为原作者，我也有不同意的权利，“海鸥”有些叛徒情绪，但也不过是叛徒情绪罢了，不值得一印，不能给别人多少东西。在京时我曾手抄以传阅和赠送过，那个，另一回事，那还勉强可以算在合法的范围内，至多你来批判我这诗便是了。一付印刷，虽是油印，亦总有点哗众取宠、惊世骇俗。一副像煞有介事之态，其实又没啥了不起，“鞋子不着落个样，月亮里点灯空挂名”，我不为也。否则，当年还曾参与地下党的散发、翻印宣传品等活动。我又不是没有半套，就说印东西，除了一听油墨少不得外，其他什么不用，使图钉把刻好的蜡纸往桌面上一钉，不照样印出来？有何难哉！不过没有着手进行耳。……鼓动，除了一般的目的还应该具体的目的，因之很该注意时机。忽视时机，单从一般目的进行鼓动，其所起的最大作用，不过是宣告自身之作为现实反对派的存在。然而这种宣告本身却是并不必要的——在主观上说是缺乏必要的，宣告不宣告，总之存在；在客观上则是缺乏意义的：一般性的鼓动，有现实本身在那里进行，进行得很好，就叫我们再去进行，也不过是把某些众所共识的事实加以重复而已，具体的鼓动则尚未有可为的实际。但有些人情绪躁动，偏好此道，叫我也没有办法。就说我代表“广场”，那也是平行联合而非垂直上下的关系；作为个人则更得尊重朋友们的共同意念。我自己便说过：造反，这是十足没有公式可代的东西。

2、《美呵》，1961 年 6 月 27——39 日

一望浩淼无际，波涛卷扬激垒；
仰看万仞犹下，拔地险巖崔巍；
美呵，亘古不竭的博大的湖海！
美呵，百世长存的壮伟的名山！

拂晓满天金浪，遥夜匝地清晖；
行空惊兽折木，裂云奋疾含威；
美呵，恒如宇宙的光丽的日月！
美呵，凛若正气的焕烈的风雷！

有什么更胜似浩淼的湖海？
有什么更趋乎雄伟的名山？

有什么美得比它们更强烈、
更崇高、更浩大、更撼人心魄？

文化源长流远，历史恢宏庄严；
双手伶俐勤巧，心怀聪明良善；
美呵，巍峨不磨的祖国的名字！
美呵，亲如慈母的民族的概念！

火炬凌空高举，战斗冲刺向前；
比和氏璧尤洁，比金刚石更坚；
美呵，风华盖世的‘自由’的形象！
美呵，琼瑰满中的‘真理’的内涵！

什么可比并得风雷的正气？
什么才近似于日月的光焰？
什么能不愧对祖国、真理、自由……
这些绝美的名词、至圣的概念？

嫉恶如仇不容，慕义似渴求津；
任他举世溷浊，孤独抱抱坚贞；
美呵，三军莫夺的心灵的正直！
美呵，鼎镬难屈的正直的心灵！

8、她的第二次入狱和狱中反抗：中国共产主义青年战士联盟、提篮桥的白毛女

9、顾雁在狱中的翻译、学习

10、1980 年平反

尾声

一、缺乏思想资源、政治经验的年轻人
二、还原真相，大饥荒中极为罕见的有思想、有行动的一次反抗
三、苏晓康在开放出版社出版的《三十年备忘录》（1987—2017）序言《一本杂志和一个时代的传奇》中提出了“独裁者学习曲线”和“反抗者学习曲线”，认为中国遍地是英雄，是陈胜吴广、孙毛，却形不成创造性的“反抗者学习曲线”。这个说法，我想称之为“苏晓康曲线”，讨论彭令昭和《星火》的精神史意义，就是寻找创造性的“反抗者学习曲线”，也许就是从反抗者向建设者的思想转换和角色定位。这是一个很大的历史题目。

傅国涌の仕事

土屋昌明

略歴と著作

傅国涌の仕事は、おもに中国近現代史の研究と著述である。1967年、浙江樂清生まれ、温州教育学院（現在は温州大学に合併）を卒業して、中学教師を勤めたあと、現在は大学や研究組織に所属せずに、杭州の自宅で執筆活動をしている（中国語で「自由撰稿人」という）。1989年から1998年までに言論が原因で逮捕されて入獄すること5回、のべ5年近くを獄中ですごしたといわれている。1999年以来、著述に専念、『書屋』『随筆』『東方』『老照片』『炎黄春秋』『南方周末』『文彙読書週報』などに200万字以上の評論文を書いている。人民網・共識網・天益思想庫などに文集コーナーがある。

主要な著作は以下のものである（「百度」をもとに付け加えたが完全ではない。すべて中国語著作）。

『脊梁：中国三代自由知識分子評伝』共著、香港：開放雜誌社、2001年。

『金庸伝』北京十月文芸出版社、2003年。修訂本、浙江人民出版社、2013年。

『百年尋夢：傅国涌歴史随筆』福建人民出版社、2004年。（本書には「中国の記者の筆によるパリ講和会議」「魯迅が亡くなったあと」「傅斯年の涙はなぜ乾いたか」「蔡鍔と袁世凱」「胡適と胡政之の通信から説き起こす」など、新しい史料を駆使したユニークな歴史エッセイがあり、李銳・章詒和・張鳴ら著名な評論家から高く評価されている）。

『追尋失去の伝統』湖南文芸出版社、2004年。

『葉公超伝』河南人民出版社、2004年。

『1949：中国知識分子の私人記録』長江文芸出版社、2005年。（本書は、新中国成立時に年齢を異にし、考え方を異にしたために、異なる選択をした著名人14人にスポットを当てて、当時の社会の大変化を浮き彫りにする。扱っているのは、梁漱溟・胡適・宋雲彬・夏承燾・浦江清・陳光甫・竺可楨・沈從文・胡風・張元濟・柳詒・夏衍ら。おもに彼らの1949年の日記・手紙・回想録などを使っている）。

『主角与配角：近代中国大転型の台前幕後』長江文芸出版社、2005年。

『発現廿八都』湖南文芸出版社、2005年。

『筆底波瀾：百年中国言論史の一種読法』広西師範大学出版社、2006年。

『過去の中学：人生最關鍵階段的教育和学习』長江文芸出版社、2006年。

『歴史深處的誤会：近代史の大人物小細節』東方出版社、2006年。

『偶像的黄昏』長江文芸出版社、2006年。

『魯迅的声音：魯迅講演全集（1912～1936）』珠海出版社、2007年。

『民国年間那人這事：看歷史中的歷史 聽故事中的故事』珠海出版社、2007年。

『文人的底氣：百年中国言論史剪影』雲南人民出版社、2007年。

『大商人：影響中国的近代実業家們』中信出版社、2008年。福建鷺江出版社、2016年。

『林昭之死 1932-1968 四十年祭』編書、香港：開放出版社、2008年。

『從龔自珍到司徒雷登』江蘇文芸出版社、2010年。

『遮蔽与記憶：名家文史精品2009』共編、湖南人民出版社、2010年。

『抉抉：一九四九，中国知識分子の私人記録』台北：八旗文化出版、2010年

『百年辛亥：親歴者的私人記録』上下、東方出版社、2011年。（本書は辛亥革命時期の役人や学生・外国人などの日記・手紙・回想録などを史料として辛亥革命の史実を再現し、この事件に新しい解釈を与えようとしている）。

『大商人：追尋企業家の本土伝統』五洲伝播出版社、2011年。

『主角与配角：辛亥革命的台前幕後』五洲伝播出版社、2011年。（本書は「役割意識」という概念から辛亥革命時期の人物を描いており、脇役に注目することで、中国の歴史学で常套的な英雄史観から脱しようとしている）。

『得寸進寸集』復旦大学出版社、2012年。

『過去の小学』同心出版社、2012年。
『過去の中学』同心出版社、2012年。
『追尋律師的伝統』北京聯合出版公司、2012年。(本書は上海の弁護士と弁護士事務所の歴史を、個別の弁護士のトピックや事件などが書かれた記録や口述、裁判判例などによって描いている)。
『常識の立場：書屋文選（1996～2001）』経済科学出版社、2013年。(書評雑誌『書屋』に収録されたエッセイ集)。
『回到啓蒙：方法文選（1997～1999）』経済科学出版社、2013年。(雑誌『方法』に収録されたエッセイ集)。
『直面転型時代：東方文選（1993～1996）』経済科学出版社、2013年。(雑誌『東方』に収録されたエッセイ集)。
『給教育燃灯』清華大学出版社、2013年。(本書は中華民国時代の教育と教育家・教育実験などを紹介するシリーズの1冊)。
『如何培養好公民』清華大学出版社、2013年。(同前)。
『讓性回歸常識』清華大学出版社、2013年。(同前、とくに性教育や思春期教育の問題に関する紹介)。
『帝国尽頭是民国』厦門大学出版社、2015年。
『無語江山有人物』広東人民出版社、2015年。
『史想録』中華書局、2016年。
『民国商人：追尋中国現代工商文明的起源』中国友誼出版公司、2016年。
『問史哪得清如許』江蘇鳳凰文芸出版社、2016年。

彼の研究の特徴について所感を記しておく。

第一に、中華民国時代の問題を執拗に考察していること。それは中国近代史が歴史として重要であるからのみならず、具体的な問題を考察することによって、中国現代のアンチテーゼを提示しようとしている。つまり、中国現代の問題と同様ないし淵源としている問題を中華民国時代に見いだして、それを議論するのである。直接議論するのは、現在の政治状況からしてリスクがある。また、そのような民国時期の問題は、もし共産党革命がなかったら、そのまま戦後の中国に持ち越され、何らかの解決なり教訓なりが得られたはずのものである。その意味で、こうした問題を考えることは、単に歴史の問題として普遍的に考えられるだけでなく、中国社会に特有の問題として、現代につながってくるはずだった。

たとえば弁護士という職業の問題である。現在の中国で弁護士がどのような逆境にあるか、よく知られている。逆にいえば、傅国涌にとっての歴史研究は、人類の普遍的な問題として考察する以上に、中国現代史の問題の代換ともいえるだろう。

第二に、政治史ではなく、社会史の問題に重点を置いていること。主流歴史学が共産党を軸とする予定調和的な政治史を構築しているのに対し、主流からこぼれた、個人の生活や歴史の脇役の重要性を考察している。主流歴史学は問題としないが、社会生活では重要な問題、たとえば性教育の問題などを採りあげている。

第三に、学術的な権威によって編纂された歴史書や手が増えられた文献に対する懐疑を持っており、個人の残した一次史料を重視している。たとえば日記や書簡を重視する。その丹念な読み込みから、社会の広い範囲の歴史へと考察を拡げていくという手法を採っている。

なお、彼は杭州の再開発に関して、法廷活動をしており、社会運動家の一面も備えている (<http://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao/fu-06212010101713.html>)。

「星火」および林昭についての研究

傅国涌の仕事のうち、とくに重要なのが「星火」および林昭についての研究である。

林昭の事跡は、当初、「星火」事件とは接続されずにとりあげられていた。1981年に新華社の文章でとりあげられたのがはじめてである(矢吹晋『文化大革命』講談社現代新書)。その後、1998年、『南方週末』および『今日名流』で林昭を記念する回想録が発表され、2000年に許覚民(林昭の母方のおじ)編『林昭不再被遺忘』(長江文芸出版社)が出版された。その後、2004年に胡傑がドキュメンタリー『尋找林昭的靈魂(林昭の魂を探して)』を制作、林昭に対する関心を強く刺激した。その年には、蘇州に林昭の墓が建てられ、林昭を記念する第二評論集『走近林昭』(明報出版社、2006年)が許覚民によって編集された。しかし、この本は大陸では出版できず、香港で2006年に出版された。

傅国涌は、これにつく第三評論集『林昭之死』を

編み、2008年に香港の開放出版社から出版した。本書は、それまでの記念論文集と違って、評論家や研究者を中心として30本の論文を集めている。彼らはすべて胡傑のドキュメンタリーから影響を受けており、そのインスパイアによって林昭の研究を進めたごとくである。『林昭の魂を探して』の中国語シナリオを収めているほか、胡傑のエッセイ「關於《尋找林昭的靈魂》(『林昭の魂を探して』について)」も掲載している。傅国涌は「林昭四十年祭」「林昭対上海検察院起訴書の批註」の二篇を書いている。今回予定されている討論会(2017年12月16日)で重要なのは、傅国涌がその後の研究を加味して新たに書いた「林昭とその時代」という論文である。本論文はインターネットに掲載され、本研究会のMLにも2017年4月30日にそのHTMLを私が流した([cr1966 00164] 傅国涌: 林昭和她的時代)。しかしその後、このページは中国当局から封鎖され、閲覧できなくなっている。そこで以下、この論文の新しい指摘をまとめておき、参考に供したい。

1 林昭個人の性格付けについて。傅国涌は、林昭が政治思想家というより詩人的な資質の持ち主だったことを強調している。この点について、彼が得意な個人の一次史料を丹念に調べる手法を使って、林昭のメモや手紙を検討している。そして、当時の革命的ロマンチズムと相容れない、プライベートな日常生活を愛する彼女の資質が、必然的に悲劇へと導いていったとみる。「これまで林昭をみると、おもに彼女がすでに外に出した個別の詩文や片言隻句にもとづいていた。私がはじめて林昭に注意するようになったのは10年あまり前だが、当時は林昭をほとんど政治的に、闘士のようにみていた」。つまり、林昭の個人的な資料を読んだ傅国涌は、『人民日報編集部への手紙』のような公開的な史料から知られる林昭とのギャップに驚かされ、個人としての側面から林昭を再考したのである。

傅国涌はその一例として、林昭が親友の倪競雄に出した手紙をあげている。その手紙で林昭は、倪競雄の住む地でシルクが作られていることを聞き、シルクの具体的な値段や製品の色、耐水性があるかなどを細かく尋ねて買おうとしている。傅国涌によれば、林昭にはこうした日常生活の細やかなものに対

する愛着が濃厚にあるという。

2 林昭が反右派闘争で右派に認定されたことについて。林昭が北京大学の雑誌『広場』の編集をし、そのグループのなかから民主化運動がおこったことは知られている。しかし、それだけが林昭批判の原因ではなく、むしろそれ以前から共産党員との確執の流れがあったことを傅国涌は指摘している。

1949年の建国前夜、党員だった林昭は、上海からの撤退を組織から命じられたが、それに従わなかった。それゆえ、国民党は彼女を逮捕しなかった。この件は、共産党員としての彼女の政治的汚点ともいえる。そののち彼女は、組織から汚点のある人物と目されるようになった。さらに、1950年ころ、南蘇にいた彼女は、土地改革に参加したが、そこに南下してきた党員幹部の下品さに憤慨した。当時彼女は19歳くらいで、同学もみなそのくらいの歳だったが、既婚の幹部が彼女たちを求めたからだ。とくに、彼女の直属の上司の指導員が、彼女と同じグループの女子を娶ったことに対する不満を半公開で発言した。これが禍根を残したという。反右派運動以前に林昭は批判されたことがあり、その理由は、彼女が涙を流して泣くことが多いのは、プチブルジョア思想のあらわれだというものである。こんな言いがかりのような理由で、彼女は千人大会で批判された。つまり、彼女に対する人身攻撃が目的だったのだろう。その精神的な打撃は相当に強かったという。

3 北京大学の教授たちと林昭の関係について。とくに1958年、北京大学の教授たちが反右派で批判されたときの游国恩と林昭の関係は、従来知られていなかった。游国恩は『楚辞』の研究者として有名だが、林昭の文学の才を愛し、彼女を新聞科から国文科に移籍させようとしていた。しかし、反右派運動が彼にも及び、それは実現しなかった。この件が林昭に反右派運動の内実を知らしめ、共産党への絶望感を招いたという。

4 林昭と「星火」の関係について。傅国涌の調査によれば、『星火』を印刷するまえに、張春元は林昭に会っているが、林昭は『星火』の印刷にも、同人による研究会の組織作りにも反対した。「星火」のメンバーで林昭がとくに交遊関係があったのは、『星火』の序文を書いた顧雁だった。顧雁との交遊

関係は10ヶ月にも及び、その間、林昭は顧雁に30～40通の手紙を書いた。そこには顧雁に対する林昭の恋慕がしたためられていた。のちに獄中で面会した張元勳に対して林昭は、『情書一束』という本をまとめたといったと伝えられていたが、これまで『情書一束』という本が何を意味しているか、よくわからなかった。傅国涌が顧雁にインタビューしたところ、顧雁は即座に、林昭が自分に送った手紙を本にしたかったのだと答えたという。じつは、顧雁は「星火」が露見して逮捕が迫るころ、林昭が巻き添えになるのを恐れて、林昭から来た手紙をすべて焼却しようとしたが、それを惜しんで、自宅の屋根裏に隠したのだ。顧雁は、自分がすでに警察からマークされていたことを知らなかった。警察は、顧雁の自宅の前に張り込みのための部屋を借りて彼を監視するという周到さだった。逮捕とともに、顧雁が隠した手紙は捜し出されて、結局、林昭も逮捕されることになった。『星火』に林昭の詩が掲載されているが、それも顧雁が林昭に無断で掲載したという。

思うに、胡傑のドキュメンタリーでは、おもに譚蟬雪へのインタビューによりながら、林昭が「星火」に直接的に関わったように描いているが、その表現には歴史的な問題が存在するごとくである。胡傑はおもに譚蟬雪の自伝『求索』にもとづいてシナリオを書いたようだが、顧雁は譚蟬雪の『求索』にも、胡傑のドキュメンタリーにも批判的である（顧雁本人も胡傑のドキュメンタリーに登場する）。私はこの問題について、本年（2017年）1月10日に合肥に住む顧雁に会って話を聞いたが、この件は話してもらえなかった。本研究会2017年6月29日例会で、甘肅の独立記者である江雪の講演をおこなったが、江雪も傅国涌と同様なことを顧雁から聞いているようだった。

5 林昭の死について。傅国涌の調査によれば、死刑を執行したのは裁判所ではなく、中国人民解放軍上海市公検法軍事管制委員会だった。これは、彼女が文化大革命における秩序維持のための軍事管制の犠牲になったことを意味する。その点では、彼女を文革の被害者とみることもできるが、当該委員会がなぜ死刑執行をする必要があったのかは、さらに検討が必要だろう。また、死刑執行の具体的な場

所も不明のままである。

このほか傅国涌は、林昭の精神疾患の問題などにも注意している。この問題を胡傑は扱っていない。そうすると胡傑は、事実にもとる描き方をしているのか、それとも、林昭のある側面を描こうとしたのか、という評価の問題が生じる。本稿では、この議論をする準備がなく、今後の課題としたい。

おわりに——林昭の事跡の封鎖と露出

上記のように、傅国涌の論文「林昭とその時代」はインターネット上で削除され、「関連の法律に抵触する」というメッセージが出されている。しかし、当該論文を読んでも、どの部分が何の法律に抵触するのか、私には理解できない。おそらく、「林昭」という人物名そのものが忌避すべき記号になっているのだろう。蘇州の林昭の墓所には、当局による監視カメラが設置されているという。現代中国の権力側が「林昭」をこれだけ忌避するとなると、現在知られている林昭をめぐる事実は、まだ氷山の一角に過ぎないのだろう。

その一方で、「林昭」という記号は、まるで秘密結社の同志だけがわかる暗号のように、現在の中国社会に出没するようになった。その事情についても、傅国涌が紹介している（傅国涌「林昭正悄悄回到我们的生活中」爱思想 <http://www.aisixiang.com/data/31051.html>）。

驚くべきことに、2009年の中学受験の国語入試問題に林昭の名前が出たという。ことわざの使用例の正解を選択する問題で、選択肢につきのような文章があった。「C. 林昭曾说：“我们的血是再鲜艳过，而且是再灿烂过的墨水，人世间其他一切墨水在这样的墨水面前统统不免（黯然失色）”」。この文は、明らかに林昭が自分の血で詩文を書いたことをふまえている。つまり、この問題を作成した人物は、林昭の事跡を知っており、わざわざそれを露出させたのだと思われる。入試問題は誰が作成したかわからないようにするものであるからこそ、こんなことが可能なのだ。複数のほかの作成者たちが、林昭の名前を知らなかったのか、知っていて黙認したのかは不明である。

また、2008年の冬、傅国涌が友人の車に同乗し

たとき、カーステレオから林昭の「プロメテウス受難の一日」の曲が流れてきてびっくりしたという。雲南のロックバンド「腰楽隊」の作品で、ボーカルは劉濤という。彼らは林昭が残した詩や曲を演奏して作品化していたのだ。

山東では、海虹という女性教師が、林昭をモデルにした長編小説を発表したという。『中国紅豆詞』（中国国際文化出版社、2008年6月）という本で、主人公の名前は「林萍」とされた。小説の形式になっているが、素材は虚構ではないとのことである。

南京では、趙鋭という女性記者が『祭壇上の聖女——林昭伝』（台北：秀威資訊科技、2009年3月）という単行本を出した。しかも、鳳凰新華集団が南京で開いた「2009年中国南京秋季館蔵図書展示即売会」で出品された。

北京では詩人の朵朵が林昭をテーマとした一人芝居をやったという。ほかにいくつかの事例が挙げられているが、たしかに林昭の事跡がオープンになりつつある。

その一方で、忌避感はどうしてもぬぐわれない。傅国涌は挙げていないが、人民大学で林昭とともに

右派とされ、彼女と結婚しようとした甘粹は『北大魂—林昭与「六・四」』（台北：秀威資訊科技、2010年1月）を出版している。本書は1989年4月15日から6月4日までの日記の形式で、叙述は1957年の北京大学の民主化運動と1989年の民主化運動のあいだを行ったり来たりしながら、中国の政治社会を議論している。甘粹の回想録であり、林昭論であり、六四天安門事件のルポルタージュでもある。周知のように、六四天安門事件の事跡は中国国内で厳しく封鎖されており、本書も中国国内では流通できない。思うに、林昭の問題が思想的に、単に反右派運動だけではなく、天安門事件にもつながるのは、みやすい構図であるが、六四天安門事件の事跡に対する封鎖と林昭に対する忌避とは、私たちが考える以上に深い関連性があるのかもしれない。傅国涌が挙げた林昭の露出の話は、すべて習近平以前のことであり、以後はむしろ制限が厳しくなっているように感じられる。今後、林昭をめぐる、中国国内でこれまでのような露出の動向が続くか、予断は許されないようだ。

〔(21) ページからのつづき〕

れるんだ」と驚いた観衆は少なくなかったはずだと思う。簡単な舞台装置で、当時の富裕な家庭を再現する。しかもそれが、張先痴が好んで回想する部分、「家には乗用車が二台あって、運転手は小林正雄という日本人だったんだ」と自慢げに話す場面だ。だが、そんな富裕な家庭背景こそが、彼ののちのちの苦しい人生を決定していたのでもある。

時計の音がチクタクチクタクと響き、白黒の画面に、鏡に向かってすわる張先痴がいる。その画面は観衆を、彼の少年時代、結婚して家庭を築き、独立して思考し、党との誤解が生じるところから、蒙昧を覚醒させるところまで、時空を超えて、あの特殊な歴史の時代へと戻らせる。監督は大胆に歴史へと闖入し、権力者に質問する。監督も右派にされたいということだろうか？たしかに、解答できないような歴史の問題に直面して、観衆の一人一人が、はっきりした解答を得たいと思ったことだろう。

2 時間あまりの映画は、私たちにあの社会を「み

る」ことをさせた。そして当時、張先痴「少年」が受けた処遇を体感し、心のなかで何度となく自問させられた、「もし自分だったら、今日まで生きてこられたらどうか？」と。張先痴は今日まで健康に生きてこられ、しかも日本に来て、私たちと笑いながら当時のことを物語るの、奇跡というほかない。

日本に来た感想について、彼は観衆の質問に答えてユーモアたっぷりに日本社会を絶賛した。聞いている者からすれば、彼のことはすべて「故事」だが、当事者からすれば、まさしく一生を棒に振った「事故」にはかならない。

時間が経ったのに気がつかないまま、交流会は終わりに近づいたが、明らかに張先痴はもっともっと話したいことがあるようだった。どうして彼には、かくも強烈な表現意欲があるのだろうか？たぶん、時間的な切迫感と他の人に任せられないという社会的責任感があるのだろう。あの社会は、無情にも彼

〔(22) ページにつづく〕

なごやかに「荒牧万佐行さん文革写真集出版記念会」を開催

11月26日、専修大学神田校舎で「荒牧万佐行さん文革写真集出版記念会」が行われ、著者・荒牧万佐行さんを囲んで、同書の編集、デザインにかかわった関係者、日中友好人士、在日華僑・中国人留学生、デザイナー、出版関係者、中国現代史研究者など多数が参加した。冒頭、土屋昌明幹事の紹介をう

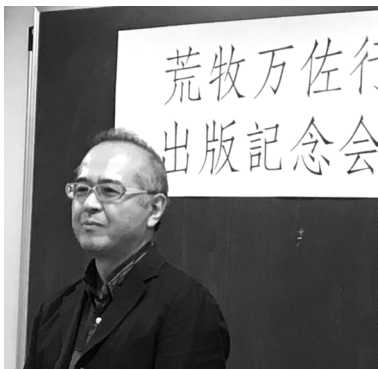
けて、荒牧さんから写真集未収録写真も含めた写真パネルのひとつひとつについて撮影当時の思い出が語られ、参加者からの質疑を受けて討議した。最後に、若いデザイナー吉見友希さん、門谷風花さんから出版お祝いの花束が贈られた。以下は当日のようである（写真はデザイナー浅田深里さん撮影）。



写真の前に思い出を語る荒牧万佐行さん(右)と司会進行・前田年昭



在日華僑・中国人留学生、研究者、出版関係者などが各地から参加



冒頭、著者と本会との縁を語る土屋昌明幹事



吉見友希さんと門谷風花さんからお祝いの花束



余録 半世紀前の人民中国は、しばしば中共と呼ばれたこともあった。中共とは中国共産党の略称だから国の名前として使うのは適切ではない。しかし、そこには、戦後、アメリカを盟主とする資本主義陣営に与した日本社会の反共意識が反映していたのである。「社会主義圏では報道の自由はなく、制限と管制のもとに置かれる」という思い込みもまた、半ばは事実にもとづき、半ばはこの反共意識による。この日、荒牧さんは自らのカメ

ラマン人生の思い出として日本の皇室の写真が自由に発表できなかったというエピソードを語った。半世紀前の中国での報道の制限は、制限をいかくぐってこうした写真を発表できる程度の「制限」だったが、日本では、現在も、皇室の写真は発表すらできない「制限」なのである。この事実をとってみても、社会主義に報道の自由がなく、資本主義に報道の自由があるという思い込みは、事実と合致していないことがわかるだろう。（前田年昭）

資料

延安各界のスターリン六十歳誕生日祝賀大会における講話

1939 年 12 月 21 日

毛沢東

【解説】スターリン問題はいまだ共産主義運動にとって、総括すべき、重要問題であり、難しい問題である。映画『星火』で、星火グループと志を共にした誠実な共産党員・杜映華が遺品として、なぜ『スターリン全集』を残したのか。毛沢東はここで、〈二〉の哲学〔第 2 期第 4 号 p.12 参照〕の立場からスターリンを擁護するとともに、文革の核心理念でもある「造反有理」という言葉を、マルクス主義の道理はつまるところこれに尽きると力説している。レーニン・スターリンの社会主義が対峙したものは何だったのか、中ソ論争から文化大革命が対峙したものは何だったのか。反右派運動を大躍進や文化大革命とひとつながりの歴史として〈内面的理解〉〔第 1 期第 4 号 p.8 参照〕をする必要があるというゆえんである。あえてここに紹介し、討議に付したい。（前田年昭）

きょうは、大会をひらいて、スターリン同志の六十歳の寿をお祝いします。「人生七十、古来稀なり」といいますが、世間では、六十歳もむづかしい。

しかし、われわれはなぜ、スターリンだけ、しかもこのように祝うのか？ 延安だけではない、全国で、全世界で、かれがきょう生まれたと知っているかぎりのひとは、かれのひととなりを知っているかぎりのひとは、圧迫されているかぎりのものは、だれであれ、かれを祝っているにちがいない。その原因は、スターリン同志が、すべての被圧迫者の救いの星であるところにあります。どのようなひとが、かれを祝うことに反対し、かれを祝うことを喜ばないか？ それは、自分は圧迫されず、他人を圧迫してばかりいるひと、第一に、帝国主義者であります。

同志諸君！ ひとりの外国人を、一万余里をへだてながら、みんながその誕生日を祝うのであります。これはなんととっても、破天荒な、前例のないことであります。

これは、かれが偉大なソ連を指導しつつあるから

であり、かれが偉大なコミンテルンを指導しつつあるからであり、全人類の解放運動を指導しつつ、中国が日本とたたかうのを援助しているからであります。

いまや、世界は闘争する二つの戦線に分かれております。一方は帝国主義、これはひとを圧迫する戦線であります。他方は社会主義、これは圧迫に反抗する戦線であります。植民地・半植民地の民族革命戦線について、あたかも中間に立っているかのよう考えるひとが一部にはありますが、この敵は帝国主義であって、したがって社会主義を友とせざるをえないし、圧迫者に反抗するものの革命戦線の側に属さざるをえない。中国の頑固分子ときては、淫売にもなりたいたいが、頌徳碑も建ててもらいたいので、片手は反共、片手は抗日、中間派を自称しております。しかし、かれらはけっきょくは成功しません。悔い改めないと、最後には、反革命の側にあゆみいるにきまっている。

革命と反革命の二つの戦線には、どちらにも主宰する人間が必要であり、どちらにも指揮官が必要です。反革命戦線の指揮官はだれか？ すなわち帝国主義であります。すなわちチェンバレンであります。革命戦線の指揮官はだれか？ すなわち社会主義であります。すなわちスターリンであります。スターリン同志は、世界革命の指導者であります。このことは、ひじょうに重要なことなのであります。全人類のなかに、かのスターリンが出た。これは大きなことである。かれがあらわれたので、ことはやりやすくなった。諸君も知っているとおりの、マルクスは死んだ、エンゲルスも死んだ、レーニンも死んだ。もし、ひとりのスターリンがいなかったとすれば、いったいだれが号令を発するのか？ ほんとうに幸いなことに、いま世界には、ソ連が出現し、共産党が誕生し、そして、スターリンがあらわれたので、この世界のことは、やりやすくなった。

革命の指揮官は、どんなことをするのか？ ひと

びとに食べるべき飯、着るべき着物、住むべき家、読むべき書物があるようにすること、であります。このようにするためには、十何億のひとを指導して、圧迫者にむかって闘争をし、最後の勝利を手にいれさせなければなりません。これが、スターリンがやろうとしたことであります。そうだとすれば、すべての圧迫されているひとびとは、スターリンを祝う必要があるのか、ないのか？ わたしの考えるところでは、必要があります。当然、すべきであります。われわれは、かれを祝い、かれを擁護する必要がありますし、そのうえ、かれに学ぶ必要があります。

われわれは、かれの二つの面を学ぶ必要があります。ひとつは、道理の面であり、ひとつは事業の面であります。

マルクス主義の道理は、千条も万条もありますが、根本をたずねるなら、つまるところは一言、「造反有理」に尽きるのであります。何千年来、いつもいわれてきたのは、圧迫有理、搾取有理、造反無理、でありました。マルクス主義があらわれてから、この古い判決をひっくりかえしてしまったのであります。これは大きな功労である。この道理はプロレタリア階級が闘争のなかでわがものとし、マルクスが結論としたものであります。この道理にもとづきやうえに、反抗し、闘争し、社会主義をやるのであります。

スターリン同志には、どんな功労があるのか？ かれはこの道理を発揮し、マルクス・レーニン主義を発揮し、全世界の圧迫されている人民のために、ひじょうにハッキリした、ひじょうに具体的な、ひじょうにいきいきした道理をつくったのであります。それはすなわち、革命戦線をうちたて、帝国主義をひっくりかえし、資本主義をひっくりかえし、社会主義社会をうちたてる、ひとまとまりの理論であります。

事業の面では、道理をじっさいにあらわしております。社会主義建設の事業にかんしては、マルクスも、エンゲルスも、レーニンも完成していなかったものでありますが、スターリンはこれを完成したのであります。これは天地開闢の大事件であります。ソ連が二つの五カ年計画をやるまでは、各国のブルジョア階級の新聞は、ソ連はダメだ、社会主義はアテ

にならんと毎日、いいたてたものですが、こんにちでは、どうですか？ チェンバレンの口までも封じてしまった。中国の頑固派連中の口もやはり封じてしまった。連中といえども、ソ連が勝利したことを承認したのであります。

スターリンは、道理の面でわれわれの抗日戦争を援助してくれたうえに、われわれに事業上、すなわち物資上の援助をあたえてくれました。スターリンは事業上の勝利によって、われわれにたくさんの飛行機、大砲、航空員、各戦区の軍事顧問、それに借款を援助してくれました。

世界で、ほかにどのような国が、かくもわれわれを援助したか？ 世界でほかにどのような階級、どのような党、どのような人間が指導する国が、かくもわれわれを援助したか？ ソ連以外、プロレタリア階級以外、共産党以外、スターリン以外に、だれがあったか？

現在、一部のひとが、われわれの友人を自称しております。だが、かれらは唐朝の李林甫のたぐいに属する人物でしかない。この李林甫先生は「口に蜜あり、腹に剣あり」といった人間だった。帝国主義はすべて、口に蜜あり、腹に剣あり、であります。チェンバレンはすなわち現在の李林甫であります。各国が中国にもついついの特権、駐軍権、領事裁判権、治外法権等々を、どの国が撤廃したか？ ひとつたりともないのであります。ソ連だけが撤廃したのであります。

過去において、マルクス・レーニン主義が理論上において世界革命を指導してきました。いまやそれにひとつくわえて、物質上でも世界革命を援助できるようになったのであります。これはスターリンの大きな功労であります。

われわれはスターリン同志の誕生日を祝ったあと、さらにこのことを全国に宣伝しなければなりません。四億五千万人にはっきりと語って、中国人民にひとり残らずわからせるのであります。社会主義のソ連だけが、スターリンだけが、われわれ中国のよき友である、と。

(竹内実訳、『毛沢東 文化大革命を語る』現代評論社、1974年、pp.2-7)

忘却を拒絶する：ある世代の歴史的責任

張先痴著『格拉古（グラグ）の夢魘』を読む

銭理群（鳥本まさき訳）

張先痴さんは『格拉古の軼事』『格拉古の実録』の 2 冊を出版したのち、この『格拉古の夢魘』を出版した。彼は私宛ての手紙で、『軼事』執筆時に私の視力はすでに衰えており、『実録』は半失明のもと、苦勞して書き上げた。この『夢魘』は口述するより仕方なく、友人が記録し、整理した」と私に告げた。これは、彼が経験したすべてを、命を賭してでも書こうということだと言ってよいが、それはなぜなのか？ 張先痴さんは本書で亡友の李盛照さんについて触れている。彼は「一生の時間をかけて大飢饉の真相を追究しようとし」、「一貫して反抗し」、「10 キロの足かせをはめられ、2 メートル平方の暗い監獄に 7 年入れられ」、「出獄後の数十年間、一貫して『歴史の真相を復元する』ことを忘れなかった」。2013 年 11 月のある日、張先痴氏のところに電話までして、どう進めるべきかを相談したが、思いがけないことに、翌日に亡くなってしまった。張先痴氏は大変ショックを受け、「この偉大な友人ならびに彼の遂げることのなかった願いのために執筆に取り掛かるべきではないか、『ある種の反抗として』の李盛照の一生のように」との誓いを立てた。張先痴氏は、深く情をこめて次のように書いている。「苦難をなめた身近な友人が一人また一人とこの世を去っていくのを前にしている。彼らの一人ひとりが、あの時代の歴史をみずから経験した者として、一人の例外もなく有り余るほどの物語を持っており、それらは語られねばならないのだ。そうしなければ、歴史の真の姿が無数のでたらめの中に埋もれてしまい、見分けがつかなくなり、誰も知ることができなくなってしまうだろう」。歴史の真相が埋もれ、曲解されることは、歴史の教訓をくみ取ることが拒絶することであり、歴史の悲劇をもたらす体制の悪弊に対して根本的な改革を行うことを拒絶することであり、歴史が再演される可能性があることを意味しており、現実生活における様々な問題も、これが決して杞憂ではないことを示している。まさにこの

ことは、歴史を自ら経験した人が、落ち着いて寝ることもできず、食事ものが通らないほど心配し、死んでも死にきれないほど不安に思っていることである。忘却を拒絶し、自身および同世代の人間の人生の物語を「余すところなく伝える」こと。このことは張先痴氏のような幸存者〔サバイバー〕のほとんど歴史的責任となっている。

また、張先痴氏が自身の人生の物語を、「格拉古の軼事」「格拉古の実録」「格拉古の夢魘」と命名し、「格拉古三部曲」を組み立てたことはさらに意味深長である。いわゆる「格拉古」は、スターリン時代の「古拉格（グラグ）収容所」の名称を逆さに記したもので、中国の労働改造所がスターリンの収容所であることを暗示しており、さらにヒトラーの強制収容所の延長であり、発展したものであることを暗示している。こうして張先痴さんは、自分や同時代人の悲劇を世界的範囲に置いて考察を加え、共産主義運動内の全体主義体制〔原文：「極権体制」〕（ソ連モデル、中国モデル）およびファシズムという根本問題を追及する。これにより、ある意味、より広範囲の視野と歴史的な深みを持つことになった。

だが、ある種の歴史の叙述として、張先痴さんの執筆の重点は、やはりこの時代の人間の人生経験と内心世界にある。私がこの『夢魘』を読み、心を最も強く揺り動かされたのは、書物全体の活字の背後に見え隠れする恐怖感である。張先痴氏によると、彼は「幼少期の記憶の始まりを思い出そうとし、記憶がある最も早い出来事を探し求めたところ、こともあろうにすべてが、多かれ少なかれ若干の恐怖を帯びたものだった」。たとえば、▽火鉢のそばで暖を取っているとよだれ掛けに引火し、大声で泣いた▽父親が自分に買ってくれた気球が突然爆発し、驚いて大声で泣いた——などである。続いて、抗日戦中の避難。警報で避難したこと。国共両党の内戦による物情騒然とした乱世の中の逃亡。常に死の脅威を感じていた。

革命参加後、真っ先に遭遇したのは父の銃殺だった。はっきり一線を描き「原文：劃清界限」。「縁を切る」という意味」でいたとはいえ、父親がかつて語っていた「俺は死んでも身を葬る所はないだろう」との予言を思い出し、やはりひそかに声をかみしめつつも激しく泣いた。革命の恐怖に彼が直面したのは、これが初めてのことだった。

だが、予想だにしていなかったのは、彼が土地改革運動の現場に参加した際、自分が恐怖の製造者「恐怖を引き起こす者」となっていたことだ。彼は一人の年老いた地主を拳銃でたたいた。「恐怖とおののきで震え、変形した老人の顔」を目にし、自分も恐怖とおそれと不安を感じた。また、涼山〔現四川省涼山彝族自治州〕での任務遂行中に、彝族を威嚇して武力をひけらかしたところ、「全部族のかしらが即座に地べたに倒れ、全身ひっきりなしに身震いしていた」のを見た時、自分も「妖魔」になってしまったとさえ思った。

その後の出来事はさらに予想を超えたものだった。1954 年の反革命分子肅清運動後、中共中央の一枚の紙が、自分のような「直系の親族が運動において殺された者」（内部の呼称でいう「血仇〔血の憎しみ〕分子」）を、要害部門（重要な部門）から一掃することを決定した。張先痴氏は軍隊から地方での仕事に転じた。これ以降、専政の利剣が頭上高くにぶらさがり、恐怖も影のようにいつもそばから離れなくなった。右派に定められても、労働教養隊に送られても、「綿密に支配・制限され、手拔かりはまれで、さらに厳しい監視支配や懲戒メカニズムがある」「天地に張り巡らされた網」の中に落ち込み、終日びくびくして居ても立ってもいられず、いかなる安全感もない。張先痴氏は逃亡を図ったが、最終的にはやはり網の中に収められてしまい、より大きな恐れの中に落ち込むことになる〔錢理群「一個人の運命とその背後の社会体制との全体的運動——張先痴氏の「格拉古の逸聞」に対する一種の解説」を参照〕。

文革が終結し、張先痴氏は普通の人の日常生活に戻ったが、内心の深みには恐怖がなお存在しており、「睡眠時、よく酷刑を受ける夢を見る。ひどい時は死刑判決を宣告される恐ろしい場面が出てくる」。

これは「苦難の記憶がいまだに心の奥で発酵している」ばかりか、現実の存在が、つまり専政の利剣が、独立思考を堅持している者一人ひとりの頭の上に、今も高みから厳しく目を見張らせていることを示している。張先痴氏本人は歴史の真相を復元しようと頑として要求するが故に、警察機関に再度話に「来ていただく」ことになり、街道の警察〔に協力する〕補助員の厳しい監視の下に置かれ続けている。〔警察との〕話であれ、監視であれ何であれ、みな恐怖を作り出している（錢理群「歴史は継続している——張先痴「格拉古の実録」序」を参照）。

こうして、恐怖、不安感が全体主義体制の特色を特に具現した精神現象となり、張先痴氏は終生、全体主義体制の支配・制限から抜け出せない。そのため彼は自身の「生命の基調は恐怖だ」と述べるのだ。問題は、こうした血涙に満ちた人生の総括が張先痴さん一人だけのものでは決してなく、私自身も含めた私たち同世代人（あるいは数代の人と言うべきかもしれない）の歴史的運命であるということである。私は今になりようやく、張先痴先生が「格拉古の夢魘」を本書の書名とした深い意味合いが分かる。これは宿命であり、我々は今でもまだ「夢魘」から抜け出ていないのである。このことは我々を悚然とさせ、考えこませずにはおかない。

張先痴氏の筆による家族の物語の描写も深く考えさせられる。彼の父、母、妻についての追憶は、本書で最も心が驚かされ魂を揺さぶられる箇所であり、私も最も共鳴を覚えつつ読んだ箇所である。私も張先痴氏とともに国民党の高級官僚の家庭出身で、国共両党分裂下における家族の分裂や生き別れ・死に別れを経験している。だが張先痴氏の家族の悲劇は私の家族よりはるかに凄惨である。私の父がただ一介の技術官であったのと異なり、張先痴氏の父親は、若いころすでに非常に深く国共両党の争いに巻き込まれていた。彼はかつて共産黨員であったが、その後、国民党に入り直した。一人の共産主義者から三民主義の信徒へと変身したのだ。巨大な歴史の変化において、こうした個人の思想的変化は、本来ならばふつうのことである。しかし張先痴氏の父親の悲劇は以下にある。彼が国民党を選択し、さらにその中央委員となり、中央警察総署の副署長、〔国民党

中央執行委員会の〕調査統計局の華中地区の責任者などの要職を歴任した頃、国民党が打ち立てていたのは「一つの政党、一つの主義、一人の領袖」の一党専政政権であり、当初の三民主義の理想から背離しているだけでなく、腐敗が不可避免的に生じ、自分でもほとんどどうしようもできないほど私利私欲をむさぼる頹廢的なぬかるみの中に最終的に落ち込んだ。息子である張先痴氏が、国民党はなぜ最終的に潰敗したのかと父に初めて尋ねたとき、父は「国民党は共産党に踏み倒されたのではなく、その腐乱により自分自身で崩壊したのだ」と答えた。だが父は同時に、「中国は共産主義を実行してはならない」とも固く信じていた。このことにより彼は、行き場のない絶体絶命の状況にぶつかった。彼は「私は墓場で死ぬことはないだろう」との予言を吐いたと前の文で触れたのも偶然ではない。だが父が予想だになかったのは、自分の息子が時代の急進思想の影響（そこには彼自身が子供に幼いころから注ぎ込んできた公平、正義などの観念のみちびきも含まれる）の中で、国民党から次第に距離を取り、共産党に傾いていく。父と子の衝突が生じたのは不可避のことだった。息子は「共産党のほうが国民党より良い」と何度となく言い、父親は「お前は共産党についてどれだけ知っているのだ？」と問い返す。息子は「共産党にはすくなくとも特務はいない」と挑発的な語気で答える。これは「特務のボス」とみなされている父親を直接傷つけた。そこで彼は突然烈火のごとく怒り、息子がそれ以降の終生忘れることのできない言葉を怒鳴り声で吐く。「お前に何がわかるか！

やつら党員は誰も彼もが特務ではないか！」息子はこの時、もちろん聞く耳を持たず、父とすぐさま言い争いになった。ついには父が一声、「お前は出ていけ」と命じ、息子はわずか 16 歳で家を飛び出ることとなった。父と子は徹底的に決裂し、袂を分かった。

これは、歴史のあの転換時代の典型的な現象である。私の兄の一人と姉の一人もあの年代に共産党に加わり、父親と異なる道を歩んだ。だが私の父は、共産党の兵士が城下に迫った時、先に台湾に渡っていた。父は上海に留まっていた母と私たち幼い子供何人かを迎えに行くのに間に合わず、解放軍が上海

を攻略するに伴い、そのまま一家は海峡の兩岸に切り離された。張先痴氏の父親は当初、〔涼山の〕西昌飛行場から先行撤退することもできたのだが、〔四川省〕楽山に閉じ込められた母親と一家の人を探すため、彼は毅然として引き返し、最終的に大陸に留まり、検挙され、処刑された。本当に「墓場で死ぬことはなかった」。

だが、さらに大きな悲劇は、父親が刑場に押送され、通り沿いで見せしめにされた時、折しもこの時すでに解放軍の戦士だった張先痴氏がそれを目にしたことにある。彼は息子として、「思った唯一のことは、こともあろうに『今日の結末は彼の当然の報いだ』ということだった」。と同時に、すぐに部隊の指導者に報告し、「父親に対する党と政府の処理を絶対に擁護します」と表明した。こうした「站稳立場」〔立場をしっかりと固めること〕は、今日から見て、理解するのは確かに難しい。だが、あの時代にはもちろん理由があった。このことはある問題、またはさらに根本的な問題に触れている。私はある文章で、1949 年以降の大陸のイデオロギーおよび体制における最大の特徴について特に触れた。つまり人の思想を改造しようとする、という特色である。だが、張先痴氏や私のような「反動家族」出身の人間にとって、思想改造の核心は「反革命の父親」と一線を画さなければならないことだ。しかしいわゆる「はっきりと一線を画す」というのは、「靈魂の深いところから血肉連なる父親の像をえぐり去り、最後のわずかな家族の情もほぼ忘れ尽さねばならず、それと交換に外から『反革命』という悪魔の影が加えられ、それにより愛を憎しみに転化させ、自ら父親に中傷を浴びせた」。「これは間違いなく一種の強制である。なぜなら、はっきりした一線を画すことができないこと自体が、人民の境界を引かれてしまい、専政の対象となる危険があったからだ」。「だがそれでも強制を自らの意志へと変えねばならなかった」。たとえば、「大義滅親」〔正義のためには骨肉の情を犠牲にする〕や「革命のためのいけにえとなる」〔階級社会においては、父子関係がまず初めの階級関係だ〕などなど、さまざまな理論を作り出し、はっきり引いた線〔父親との縁を切ったこと〕を崇高なものとした。私たちのような人たちは、体

制の威嚇と革命倫理の惑わしのただ中で、半ば迫られ、半ば「自覚」的に父親と「はっきり一線を画し」、自分を養い育ててくれた両親を無情にも傷つけ、最も基本的な人間性をも失っていたのだった！〔「私の家族の回想録」の「前言に代えて」：「忘却の背後の歴史観および倫理観」を参照〕

これこそが私たちの世代の最も恐ろしい記憶であり、これこそが本物の「中国の特色」である。人に対して行為を支配・制限し、肉体的に虐げただけでなく、人の心、たましいや思想をも支配・制限し、精神を切り刻み、最終的に人を党の従順な道具となし、政治、経済、文化、思想の大一統を実現しようとしたのである。これは、中国の「格拉古」の全体主義体制が、スターリンの「グラグ」の全体主義体制やヒトラーのファシズムの全体主義体制に対する、「青は藍より出でて藍より青し」的な「創造性」の発展と言えるだろう。

こうした家族の分離、父子の反目という大悲劇には、もう一人、触れないわけにいかない担い手がいる。それが母である。そこで、本書の最も心を動かされる文章「わが母親」が生まれた。張氏の母親は民国の新女性でもあり、女子師範学校の学生で、結婚後、家事を取り持ち、子供を養い育てる主婦となった。40歳のとき、突然、父親〔夫〕が逮捕され銃殺されるという不慮の災難に遭う。人から尊敬を得ていた夫人が、一夜の間に反革命家族へと変身し、人々がみな懐疑の目で、ひいては敵視のまなざしで見つめる「不可触民」と化したのだ。さらに家族の経済的な収入源が徹底的に断たれたため、一家の生計を維持すべく、母親は自分で臨時雇いの仕事までしなければならなかった。息子である張先痴氏が労働教養に送られてから、彼女はさらに昼夜分かたず心配に暮れ、孫の扶養はもちろんのこと、息子にも仕送りをしなければならず、八方手を尽くして食糧配給切符を節約した。張先痴氏の言葉で言えば、彼女は息子を、出獄時の46歳までずっと養ったのである。子や孫のために一切を消耗し尽くした後、彼女はアルツハイマー病を患い、最終的にこの世を去って行った。張先痴氏は後ろめたさを深く感じつつ、次のように母親の一生を総括している。「40歳から92歳でこの世を去るまで、まるまる52年間

寡婦を通した。母親がこの間、その手で育て上げた子女および孫世代は20人を下らない」、「全ては親切で思いやりがあり、善良なあの心から出たこと」で、自分を支え、一家を支えてくれた。張先痴氏は牢屋の中で、熱い涙を浮かべながら母に宛てた長い詩を書いた。そのうちの一首に、「彼女の手の上には、永遠の時間をかけても織り終えない毛糸の玉が、足だらひの中には、永遠に洗い終えない汚れた衣服がうずたかく」とある。

ここで私は自分の母親に対する、とわに変わることのない記憶を思い出す。同じ様に、「簾いすに端坐し、終日黙々と機を織り、笑みもなかった」。私は「永遠にこの聖母図の前に頭を垂れたいと思う」と述べた〔「これもまた一種の強靱さと偉大さ——亡母の逝去20周年祭」を参照〕。この「聖母図」は「格拉古の夢魘」の中で生活したこの世代の人間のものであり、彼女は私たちの尽きせぬ苦難における心の慰めなのだ。

こころ、たましいの慰めとなるのは、ほかには妻である。私たちがこの書を読み、議論する上で、このことにも触れないわけにいかない。「私の妻」という回想部分である。張先痴氏は、「私が80歳余りの今日まで生きてこられたのは、そしてそのことに最も感謝すべきなのは、この賢く気立てが優しい、善良で聡明な私の妻・楊文婷である」と言う。「彼女は私の守護神であるかのよう」で、「彼女がいなければ、私の一切はない」。このことはおそらく、大難を生き延びたすべての幸存者共通のめぐり合わせであり、生の体験でもあろう。「格拉古」の時代の被害者がいかにして生き延びたのかについての討議の際、私は特に「女性」の力と守護神的作用について触れた。「女性——妻、母、子女、に対する思慕と愛こそが、すべてを剥奪されたあと、奪い去ることができない唯一のものであり、何一つ所有していないこれらの受難者が、人間性の自覚を維持する上での最後の支えとなり、彼らが非人間的な罪悪と向き合い対抗する際の最も強力な精神的な力となる。女性の存在があれば、それが思慕であれ、夢や幻における女性の存在であれ、これらの男子たちは革命の地獄に押しつぶされることはないだろう」。「これはまことに、地獄における生命の最も強い声

なのだ」(「地獄における歌声」)。

我々は議論をさらにいっそう深めてもよい。「女性の力とはどこにあるのか?」と。私が見るところ、それは主に持って生まれた人間性の力だ。女性は、人が本来持つ性質の、真、善、美が集中して具現化したものである。ここですぐ気づくことがある。張先痴氏の苦難の記憶において、終始何人かの「善い人」が存在していることだ。本書の叙述には、母親、妻のほかに、多くの学友、苦難を共にした友人に関する美しい追憶がある。たとえば、彼が「格拉古の軼事」の中で自ら述べるところによると、「受難者が生き延びることを支える重要な要素は、善い人の存在に他ならない。彼らの身には人間性の善良な光

の筋がきらきらと輝いており、その魅力は無限に極まりない」。私も論評の中で次のように強調した。「この人間の生まれつきの性質、人間の良心というのは、いかなる力・体制をもってしても『網で覆う』ことはできない」。これは我々が『格拉古の夢魘』から抜け出すための希望でもある。「人がまだいる限り、人は最後の勝利者となる」(「一人の運命およびその背後にある社会体制の全体的運動」)。私が見るところ、これがまさに張先痴さんの「格拉古三部曲」の苦難の記憶の背後に潜む主題なのである。

2017 年 3 月 7 日～9 日

(張先痴著『格拉古夢魘』序文、張先痴著『格拉古夢魘』は文婷書屋出版から近刊予定、邦訳無し)

張先痴纪录片放映活动观后感 / 張先痴のドキュメンタリー上映活動参加記

王瑄

2017 年 9 月 29 日, 30 日, 连续两天在东京专修大学放映了 3 部同一主人公的纪录片作品,《张先痴介绍》,《格拉古之书》和《痴》,这个主人公就是传说中的“民国公子”,遭受了 23 年牢狱之灾的“写作才子”张先痴老先生。

第一次见到张老,心里还有点小紧张,因为在正常人的意识里,几乎在黑暗的牢房里耗尽了大半青春,如今 80 高龄,却仍然生活在水深火热之中的右派老人,想想都觉得有满腹牢骚是完全可以被理解的。然而,张老却是个说话慢条斯理且妙语连珠的健谈老者,刚刚接触就一扫心中预期的刻板右派印象。说到健谈,张老开玩笑地说,这是因为呼吸到了新鲜空气,脑子都好使。旁边一直守护着一个年轻的女士,她就是当年 21 岁就嫁给这个 49 岁右派的夫人杨文婷。

夫人搀扶着张老进入会场,全场响起热烈的掌声。乍看起来,除了走路要人搀扶之外,并看不出张老视力有问题,聊天才知道,现在张老几乎完全处于失明状态,只能有一点微弱的光感。因为失明,老人家还有满腹的故事想写,无奈只能找人代笔,而代笔对一个作家来说几乎相当于废了一半的武功。为这个老人出生在那个年代而遭受无数痛苦而心痛,更为一个写作的战士失去武器而惋惜,随着一点点的接触和了解,对这个杖朝之年的老者越发敬佩。

对张老的了解,最多的还是在从影片里获得的信息。《张先痴介绍》这部短片里大概的了解了他的青少年,中年的生活状况,了解到了那个时代背景下作为一个普通中国人无法逃离的命运缩影。



张先痴, 1934 年出生, 原名张先知, 湖北黄冈人, 父亲为国民党中央警署副署长张家驹, 49 年十一月下旬, 张先痴因骂父亲“特务”, 离家出走。在解放军部队里当通讯兵, 参加土改, 后因家庭出身问题被迫转业, 55 年 19 岁的张先痴结婚, 56 年被打成右派, 开始劳教生活。64 年因叛国罪判刑 18 年。80 年 8 月 23 日, 张先痴终于收到平反裁定书。

人生的几个重要转折点, 从老人的口述中已经听不到太多激动的情感掺杂在里面了, 平淡的描述让作为观众的我了解了发生在这位老人身上的“故事”, 在劳教折磨, 逃亡生涯, 妻离子散之后总结出了自己的命运“就算我是个哑巴, 他也会把我打成右派”。张先痴与那个社会的关系, 正如钱理群所说, “一个

人的命运及其背后的社会体制的整体运动”，最恐怖的是无处可逃。

本以为《张先痴介绍》里已经了解了他的大部分人生，但其实在《格拉古之书》里，除了残酷的劳教生活之外，我们看到了张先痴的下半场，也就是在他平反之后 49 岁时结识了现在的妻子杨文婷。当时年仅 21 岁的她，因为被张老的经历，精神，才气所感动，勇敢的站在了张老的身旁，开始了他们困难重重的爱情之路，当然他们的爱情越来越被认可，也越来越甜蜜。有神论者也许说，上帝被他的虔诚所感动，赐给了张老晚年一段令人羡慕不已的爱情。而无神论的我认为这完全是出于张老的个人魅力，他的传奇经历，加上他的勇敢，幽默，吸引了 21 岁的杨，让她义无反顾的成为右派夫人，并且为他生了个“右二代”。

不论上面两部片子，多么真实，多么精彩的讲述，但是对于没有经历过那段历史，且对那段历史也没有太多了解的 80 后来说，脑补当年意气风发，思想先进的张先痴，离家出走，3 进凉山，“打”成右派，显然脑补的画面是空洞的，甚至是无力的。而这些空洞在《痴》这部另类纪录片里得到了很好的弥补，更准确的说是加深了对张先痴故事的理解，不，应该更准确的说是发生在张先痴身上这场“事故”的切身感受增加了几倍。

网上对《痴》这部纪录片评价很高，早就想看，无奈一直没有机会，这次在东京放映，看了 2 边。首先这部另类纪录片的创作手法是前所未有的，想必吃惊于“哇，纪录片可以这么拍”的观众应该不在少数。简单的布景，再现了那个当年富裕的家庭，这也是张老很爱回忆的一部分，“家里有两部小轿车，司机是个日本人，小林正雄”，张老自豪的说。但也正是因为这么富裕的家庭背景，注定了他日后坎坷的人生。

时钟滴答滴答的响着，黑白画面里，坐在镜子对面的张先痴，带着观众从他的童年到成家立业，独立思考，和党的误会，直到懵懵懂懂的觉醒，穿越时空，回到那个特殊的历史时期。导演还大胆的闯进历史，质问当权者，难不成导演也想当回右派？的确，面对无法解答的历史问题，每个观众心里都想问个清楚吧。2 个多小时的电影，让我们“看”到了那个社会，体会了一下当年“小张”所受到的待遇，心中无数次的暗暗问自己，“如果是我，还能活到今天吗？”。奇迹的是，张老健健康康的活到了今天，并且来到了日本，

还和我们谈笑风生忆当年。

说到来日本的感觉，他赞不绝口，幽默的回答着观众的提问，对听者来说，这一切是“故事”，而对当事人来说，无疑是一场用尽一生承受的“事故”。

不知不觉交流会接近了尾声，很明显，张老还有很多很多想说的话。为什么他有这么强烈的表达欲望？我认为应该是时间的紧迫感和责无旁贷的社会责任感吧。那个社会无情的夺走了他的青春，他要表达，他要把那段黑暗的青春说给正在青春的我们，这一次来日之旅，也算是一次中日民间反右罪行的结算了。

日訳

張先痴のドキュメンタリー上映活動参加記

2017 年 9 月 29 日・30 日の連日、東京の専修大学で同一主人公のドキュメンタリー三作『張先痴の紹介』『グラグの書』『痴』が連続上映された¹。この主人公は、伝説的な「中華民国の公子」であり、23 年間も獄中生活をおくった「著述の天才」たる張先痴さんだ。

はじめて張先痴に会って、けっこう緊張を感じた。というのは、ほぼ真っ暗な監獄で青春の大半を消尽し、いまや八十の高齢でありながら、依然として火中に入るような政治的抑圧を受けている右派の老人だ。私のような凡人の意識からすれば、不平不満のかたまりであっても当然だと思われた。ところが張先痴は、話し出すと理路整然、しかも巧みな言葉が口を突いて出るような弁の立つ人だった。ちょっと接しただけで、心の中で予想していた型とおりの右派の印象は一掃されてしまった。弁が立つというと、張先痴は笑いながら答えた、「今日は（日本で）新鮮な空気を吸えたから、脳ミソがよく働くんだ」。彼のそばには一人の若い女性がじっと見守っている。彼女こそが当時 21 歳で 49 歳の右派に嫁いだ張先痴夫人の楊文婷さんだ。

夫人が張先痴に付き添って会場に入ると、満場から熱烈な拍手が湧き起こった。みたところ、歩くときに付き添いが必要な以外、彼の視力に問題がある

1 『張先痴の紹介』 翰光監督作品（今回の張先痴来日のために制作、30 分）、『グラグの書』 胡傑監督作品（2013 年、38 分）、『痴』 邱炯炯監督作品（2015 年、138 分）。

とは思えなかった。話を聞いてはじめて知ったが、現在、張先痴はほとんど失明状態にあり、わずかに微弱な光を感じるだけらしい。失明のため、書きたい話が心に充ち満ちていても、誰かに代筆してもらうしかない。だが、代筆というのは、一人の作家からすれば、手をもぎとられたも同然だ。この老人が、あんな時代に生まれて数々の苦しみを嘗めさせられたことを思うと悲しくなるが、そればかりか、一人の著述の戦士が武器を失ったことも惜しまれてあまりある。少しずつ接して理解するにつれ、この杖にすがって歩む老人に、よりいっそうの尊敬を感じるようになった。

張先痴についての理解の多くは、やはり映画作品から得られたものだ。『張先痴の紹介』という短編では、彼の青少年から中年時代の生活状況が知れた。あの時代という背景の下では、一人の普通の中国人としても運命から逃れるすべがないこと、それを縮図にしたものだった。

張先痴は 1943 年生まれ、もとの名は張先知、湖北黃岡の人、父親は国民党中央警察署副署長の張家駒。49 年 11 月下旬、張先痴は父親を「特務」と罵倒したために家を出た。解放軍の部隊で通信兵をつとめ、土地改革に参加ののち、家庭の出身問題で転業させられ、55 年に 19 歳で結婚、56 年に右派と判定され、労働教養の生活が始まった。64 年に国家反逆罪で懲役 18 年の判決を受けた。80 年 8 月 23 日に張先痴はやっと名誉回復の裁定書を受け取った。

人生の重要なポイントでも、老人の語りから激しい感情の交じったようすは聞き取れなかった。淡々とした話しぶりは、聴衆としてそこにいる私に、この老人の身の上にかかった「物語（故事）」を知らしめた。労働教養での苦難、逃亡生活、家族と別れ別れとなったことを語ったあと、彼は自分の運命を総括してこういった、「たとえ私がものを話せなかったとしても、やはり右派とされたはずだ」。張先痴とあの社会の関係は、まさに錢理群がいうように、「ある人の運命およびその背後の社会体制の全体的な運動」である。つまり、逃げるさきがない、ということが最も恐ろしい。

『張先痴の紹介』で彼の人生のだいたいを理解し

たと思っていたが、『グラグの書』では、残酷な労働教養での生活以外に、張先痴の後半生をみることができた。名誉回復後、49 歳で現在の妻の楊文婷と知り合ったことだ。彼女は、当時弱冠 21 歳だったにもかかわらず、張先痴の経験と気概と才能に感動し、勇敢にも張先痴のかたわらに立って、困難に満ちた愛の道を歩み始めた。彼らの愛は次第に人々からも認められ、より深まっていった。有神論者はこういうかもしれない、「神さまが彼の誠実さに感動して、晩年に人も羨む愛の生活を賜ったのだ!」と。だが無神論者である私には、完全に張先痴個人の魅力から出たことだと思われる。彼の伝奇的な経歴、勇敢さとユーモアが、21 歳の楊文婷を引きつけ、困難を顧みずに右派分子の奥さんにならせた。そして彼女は「右二代（右派の二代目）」を生むことになる。

これら二作品が真実かつ精彩に富んだ描写をしていても、あの時代を経験したことのない、あの歴史をさして知らない 80 年代生まれからすると、当時、意気盛んで先進的な思想の持ち主だった張先痴が家出し、三たび大涼山に入ったときには右派として「打」倒²されたと脳内補完³しても、明らかに脳内補完の画面はからっぽで無力だ。しかし、こんなからっぽでも『痴』という別種のドキュメンタリーなら、補完してくれる。より正確に言えば、張先痴についての「物語（故事）」の理解を深めてくれる、というか、張先痴の身の上におこった「事故」に対して、何倍も身につまされる。

『痴』というドキュメンタリーについて、インターネット上での評判は高く、前から見たいと思っていたが、ずっとその機会が無かった。今回、専修大学での 2 回の上映を 2 回ともみた。まず、このドキュメンタリーの創作手法は今までに無かったもので、「わあ、ドキュメンタリーって、こういうふうに撮
〔(11)ページにつづく〕

2 張先痴はそれ以前に、土地改革と少数民族対策で二度大涼山に入って、地主やイ族の棟梁を「打」倒したが、三度目は自分が右派として「打」倒され、同じ大涼山で労働教養を受けることになった。

3 「脳内補完」はアニメ用語で妄想すること。80 年代生まれの発想方法を言っている。

中国現代史構築の素材発掘

江雪報告を聞いて

矢吹晋

胡傑監督の描いた林昭像が鮮烈なのは、監督自身が版画を刻み、書を能くする芸術家肌の感性が活かされたためであろう。譚蟬雪（もと中国敦煌研究院研究員）の『星火——兰州大学“右派反革命集团案”纪实』は、錢理群の序文「心は顫動的、血は熱的、灵魂是圣洁的！」（心はふるふると震え、血は熱く、魂は清らかだ）が示すように、「这是一本血写的书。这是一本拷问我们灵魂的书。这是一本期待已久的书」（これは血で書かれた書物であり、私たちの魂に問い詰める書物であり、久しく期待されていた書物）である。ここでは、印刷物『星火』に直接関わった「同志」の証言が記録されている。これら二つはいずれも極めて貴重な証言・記録ではあるが、これだけの材料を林昭や『星火』のすべてと理解するならば、不十分であることを教えてくれるのが、若いジャーナリスト（元『華商報』『財新』を経て、現在、独立記者）の密着取材記録「向承鑑」である。

向承鑑とは、どんな人物か。江雪のブログ「一个人的独立访问」によると、略歴は以下のごとくである。

1938 年、河南生まれ、江西省武寧で育つ。1956 年、蘭州大学化学系に入学、1957 年 7 月、右派とされ、1958 年 8 月、下放して天水の武山県で労働。1959 年冬、張春元・譚蟬雪らと『星火』雑誌を創刊。1960 年 9 月、『星火』によって「反革命集团」という罪名で逮捕され、懲役 18 年の判決。1978 年に出獄、1981 年に星火事件は名誉回復。その後、中学で教師となり、高級教師に任じられ、校長にもなる。定年後は研究と著作に従事。著に『马克思主义之异见与反思（マルクス主義の異見と反省）』（香港で出版）。自伝に『炼狱归魂（魂の煉獄からの帰還）』（未出版）。

なんと私と同じ年ではないか。彼は隣国の煉獄を生き延びて、静かな口調で淡々と人生を語る。ここ

には紛れもなく、風雪に耐えた、最良の中国知識人の横顔がある。

話は変わるが、今年の 6 月 15 日、森瑞枝さんに誘われて、牛に引かれて善光寺参りしながら、国会南門の集会に出てみた。1960 年以来、57 年ぶりのことだ。永遠に若い樺美智子の遺影としなやかに生きている向承鑑の横顔が重なる。さまざまな感懐が胸をよぎり、「ワルシャワ労働歌」が声にならなかった。数日後、アンジェイ・ワイダ監督の遺作『残像』を見た。カンディンスキーやシャガール等と交流のあった前衛画家ストゥシェミスキ（1893-1952）が、スターリンの傀儡政権の手下を象徴するマネキン像と格闘しながら絶命する 4 年間の苦闘を鮮やかに描いている。ポーランド映画との初めての出会いは『地下水道』（1957 年）であり、60 年後に『残像』を見て、首尾がつながった。

「地下水道」に追いつめられたポーランドの若者たちには、希望があり、鉄格子のかなたに理想が燃えていた。その理想の帰結をワイダは『残像』に残した。

東欧における反スターリン主義の息吹を感じた中国知識人の最良の部分が、中国の内なるスターリン主義を批判して、煉獄につながれ、辛うじて生き延びた者たちがいま静かに語り続けている。向承鑑の語る「反右派闘争」は、胡傑の映像とも、譚蟬雪の文字記録とも、重なりながら、大きく異なる部分がある。林昭の血書、譚蟬雪の文字記録、向承鑑の音声記録（そして未刊の『煉獄』）、これらの素材を十分に解説することによってはじめて、中国現代史を構築できよう。いまは素材を発掘する最後のチャンスである（瓢箪から駒がでるように、居酒屋で生まれた企画——天水や向承鑑を訪ねる旅を実現したい。2017.7.4）

〔(11) ページからのつづき〕

の青春を奪い取った。だからこそ彼は語ろうとし、表現しようとする。あの暗黒の青春を、いままさに青春にいる私たちに語ろうとするのだ。今回の彼の

来日は、中国と日本の民間における、反右派運動という罪業の一つの清算でもあった。

（翻訳と注：土屋昌明）

胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕（その 4）

土屋昌明 編訳

〔前号から 026 のつづき〕

張玲：林昭那种衣服在上海来还是挺时髦的呢！她很喜欢喝酒，所以我今天给她带来了，真的是白酒。我那首诗里不是写了吗：“每饮宴，怎能忘，祭泪清樽。”其实她没有酒量，……一点也没想到她后来会是那样的一种遭遇。

張玲：林昭のああした格好は、上海でもはやりだった。お酒も好きだったから、今日はお酒を持ってきた。本当の焼酎。私の詩でも書いたように、「飲むたびに、忘れられようはずもない、涙して飲み尽くす」。でも、彼女はそんなに強くはなかった…そののちあのような目に遭うとは、まったく思ってもいなかった。



027

北京大学未名湖畔。

北京大学未名湖のほとり。

沈沢宜湖州师范学院文学系教授、诗人，原北大《广场》副主编。

沈沢宜、湖州師範学院文学系教授、詩人、もと北京大学『広場』副編集長。

沈沢宜：天上飘着些微风，地下飘着些微雨……啊……微风吹拂我的头发啊……叫我如何不想她。

沈沢宜：天にそよ風が漂い、地に霧雨が漂う、ああ、そよ風はわが髪をふく、ああ、彼女を想わせることよ。

解説：这是50年代沈沢宜在未名湖畔追求林昭时唱过的一首歌。

解説：これは50年代に沈沢宜が未名湖のほとりで林昭を口説いたときの歌。

028 50年代当時のニュース映像。

解説：1956年国际共产主义大家庭形势骤变，在苏联赫鲁晓夫作了批判斯大林的秘密 报告，在波兰、匈牙利爆发了知识分子领导的民主运动，而秘密报告也在中国的知识界悄悄流传，这使得毛泽东对知识分子开始警觉。

解説：1956年、国際共産主義の形勢が激変した。ソ連ではフルシチョフがスターリン批判の秘密報告をおこない、ポーランドやハンガリーでは知識人が導いた民主運動が勃発した。フルシチョフの秘密報告は、中国の知識界にもひそかに伝わり、これが毛沢東に知識分子への警戒を喚起させた。



029

陳奉効：原北大数学系学生，退休教师，原北大《广场》编辑部负责人。

陳奉効、もと北京大学数学系学生、退職教師、もと北京大学『広場』編集責任者。

陳奉効：苏共二十大召开以后，就揭露了斯大林的残暴，北大当时有外文报纸叫 Worker's Daily 就是英国工人日报，就刊登了赫鲁晓夫的秘密报告的全文，当时我外语不错看了，我和北大数学系的助教任大修，任大修后来死在劳改队了，还要唐茂琪，当时我们三个看了，还翻译了这个报告。

陳奉効：ソ連共産党第20回大会以後、スターリンの暴虐が暴露された。北京大学には当時、Worker's Daily というイギリスの労働者新聞があり、そこにフルシチョフ秘密報告の全文が載った。当時私は外国語ができたので、読んで、私と北京大学数学系の助手だった任大修と唐茂琪の3人で読んで、この報告の翻訳まで作った。任大修はその後、労働改造所で亡くなったが…。

030 50年代当時のニュース映像。

解説：针对国际形势的变化，毛泽东在国内设定了引蛇出洞的方案，

解説：国際的な情勢変化に対して、毛沢東は蛇を穴から誘い出すやり方をとった。

原新闻片图像和配音：四月二十七日中共中央发出关于整风运动的指示，广大群众和爱国人士积极响应，向个别党员和干部提出了大量有益的批评和建议……。

当時のニュース映像と吹き替え：4月27日、中共中央は整風運動の指示を出した。広範な大衆と愛国人士が積極的に対応し、個別の黨員や幹部に有益な批判と意見を大量に出している……。

人民日报：褚安平：向毛主席和周总理提些意见
『人民日報』：褚安平、毛主席と周恩来総理に意見を提出。

解説：毛泽东在为中共中央起草的党内指示中说：党报正面文章少登，大字报必须要让群众反驳，高等学校组织教授座谈，向党提意见，尽量使右派吐出一批毒素来登在报上，可以让他们向学生讲演，让学生自由表示态度，最好让反动的教授、讲师、助教及学生大吐毒素，畅所欲言。他们是最好的教员。（毛泽东选集第五卷第432页）

解説：毛沢東が中共中央起草の党内指示でこう言っている。「党の機関誌は、党のプラス面の文章を少なめに載せる。大字報は、かならず大衆に反駁させなければならない。大学では、教授の座談会をひらいて、党への意見を出させ、できるだけ右派に毒素を吐かせて、それを新聞に発表する。彼らに学生のまゝで演説をさせ、学生に自由に態度表明させたらよい。反動的な教授、講師、助手、学生に毒素を大いに吐かせ、言いたいことを存分に言わせるのがいちばんよい。彼らは、いちばんよい教師なのである」。

『毛沢東選集』第五卷「力を結集して右派分子の気違いじみた攻撃に反撃をくわえよう」（1957年6月8日）1977年、外文出版社日本版、666頁を参考に改訳]

031

李锐，1958年毛的秘书，兼水力部副部长。

李銳：1958年に毛沢東秘書、水力部副部長。

李锐：他只对他自己主观与客观负责，他认识的主观他认识的客观，我个人只对这个负责，别的我都不管。毛是这样一个人。

李銳：毛沢東は、自分の主観と客観だけに責任を持つ。自分の認識した主観と客観、それだけにしか責任はとれない、ほかはどうでもよい。そんな人間だ。

032

解説：有人说这是阴谋，我们说这是阳谋，因为事先告诉了敌人，牛鬼蛇神只有让它们出笼，才好歼灭它们……。总之，这是一场大战，不打胜这一仗，社会主义是建不成的。而且有出“匈牙利事件”的某些危险。（毛泽东选集第五卷437页）

『毛沢東選集』第5巻の映像。

解説：「ある人はこれを陰謀だというが、我々はこれを陽謀だという。なぜならこれはあらかじめ敵に告げてあったからである。妖怪変化は隠所から出させてはじめて殲滅しやすくなるのだ……」。「要するに、これは一大合戦であり……この戦いに勝たなければ、社会主義はきずきあげられないのだ。そのうえ、「ハンガリー事件」がおこる危険性もいくらかある」。

『毛沢東選集』第5巻「文匯報のブルジョア的方向は批判すべきである」（1957年7月1日）1977年日本語版、673頁、「要するに」以下は、同巻「力を結集して右派分子の気違いじみた攻撃に反撃をくわえよう」668頁を参照して改訳。

033



解説：在毛泽东引蛇出洞的阳谋中，北京大学中文系的学生张元勋、沈泽宜，在五月十九日贴出了用诗写的《是时候了》的大字报，揭开了北大5.19民主运动的序幕。

当時の集合写真と「是时候了」の活字本の映像。

解説：蛇を穴から出させる毛沢東の陽謀の中で、北京大学中文系学生の張元勳と沈沢宜らは、5月19日に詩「その時だ」を大字報に貼りだし、北京大学5.19民主運動の開幕となった。

034



沈沢宜湖州师范学院文学系教授、诗人，原北大《广场》副主编。

沈沢宜、湖州師範学院文学系教授、詩人、もと北京大学『広場』副編集長。

沈沢宜：是时候了，年轻人放开嗓子唱，把我们的痛苦和爱情，一起都泻到纸上，不要背地里不平，背地里愤慨，背地里忧伤。心中的甜酸苦辣都抖出来，见见天光。即使批评和指责急雨般地落在头上，新生的草木，从不害怕太阳的照耀。我的诗是一支火炬，烧毁一切人世的藩篱。它的光芒无法遮拦，因为它的火种来自——“五四”！！！

沈沢宜：「その時だ。若者よ、口を開き歌おう、わが痛苦と愛情とを、すべて紙の上に吐き出そう。かげで不平をたれたり、憤慨したり、ふさいだりせず、心中の甘美と辛酸とをさらけ出し、天の光に曝そう。たとえ批判と叱責が雨あられと降ってこようが、新たに生えた芽は、太陽の輝きを恐れないものだ。わが詩は一丈の炎、人の世のすべての垣根を焼き払う。その光は覆い隠せない。なぜなら、その火種のみなもとは——「五四」だから！

035

张元勳：曲阜师范大学中文系教授，原北大《广场》编辑部主编，林昭北京大学的同学。

張元勳、曲阜師範大学中文系教授、もと北京大学『広場』編集長、林昭の同窓生。

张元勳：在当时来讲这是非常惊人的语言，在俺中国没有人说这样的话，都一致共产党好，好好好、是是是，忽然说出这样的声音来了，太引人注意了，于是

围着看大字报的人越来越多。第二天清晨，我们再到这地方看时，在《是时候了》大字报周围贴了许多大字报，我们一看有两类，一类是很好，赞美，真是时候了，一类是：是什么时候，是你们反革命的时候了？于是这两类就开始争论。争论的大潮就展开了。

張元勳：当時では、これは驚くべき内容だった。中国でこんなことを言った人はいなかった。みんな同じく共産党はよい、共産党は正しいと言っていたなかで、いきなりこんな声があがったから、ひとく注目を集めた。それで壁新聞を見に来る人がどんどん増えた。翌朝、貼った所にもう一度行ったら、「その時だ」を貼った所の周囲に壁新聞がたくさん貼ってあった。見ると二種類ある。一つはすばらしい、賞賛、まさにその時だ、というもの。もう一つは、何の時だって、おまえら反革命の時じゃないのか、というもの。それからこの二種類が議論を始めた。議論の波がおこった。

036



王謹希，林昭北大的同班同学。

王謹希、北京大学での林昭のクラスメート。

王謹希：张元勳、沈沢宜贴出全校的大字报《是时候了》，林昭和他们是一起的。我们当时是没有参加他们，而且从思想上坦白的讲也是不赞成的，对党提意见、整风可以，不要这样情绪化。

王謹希：張元勳と沈沢宜が全学的な壁新聞「その時だ」を貼り出したが、林昭は彼らといっしょだった。私たちは当時、参加しなかったし、思想的にも、正直言って賛成ではなかった。党への意見や整風はいいとして、このように感情的にはしたくなかった。

037

张元勳：下午北大校园的大字报一下满了。数不清多少，所有的墙壁全是红纸，这北大的学生真厉害。于是又引发了对中国问题的认识的其他大字报。

張元勳：午後、北京大学のキャンパスの壁新聞はあつという間にいっぱいになった。数知れずだ、壁と

いう壁が赤い紙になった。北京大学の学生は本当にすごい。そこで、中国の問題を考えるほかの壁新聞も登場した。

038

陈奉效：哲学系の龍英華が貼った大字報《我们的一个大胆的建议》要开辟自由论坛，当时我看了以后，马上我就回到数学系，邀请了张景中、杨路、还有钱汝平，我们四个人就写了一张大字报叫《自由论坛宣言》，我们提出了几点主张，取消了党委负责制，要求民主办校，当时的话一下就炸了。

陳奉效：哲学系の竜英華が貼った大字報「私たちの大胆な建議」は、自由な議論の場を開くよう求めた。私はこれを見て、すぐに数学系に戻って、張景中と楊路と錢汝平を呼んで、四人で「自由論壇宣言」という大字報を書いて、いくつかの主張を出した。共産党委員会の大学管理制度の解消、民主的な大学運営だ。このことはたちまち大騒ぎになった。

039

解説：在这一时期，林昭发表了“组织性与良心”的演讲，并写了诗的大字报进行论战。

大字報と林昭の写真。

解説：この時、林昭は「組織性と良心」という演説を発表し、詩による壁新聞を書いて議論に参加した。



040

王謹希：所以她（林昭）是一个校里面有了名的人物，我们班还有个王国乡也是这个情况，他是写了一篇文章《有头脑的人不要这样想》，那是人民日报点了名的，那个同学很有思想。

王謹希：彼女（林昭）は学内で有名人になった。うちのクラスで王国郷というのが同じような状況だった。彼は「頭のいい人ならこうは考えない」を書いた。それは人民日報のことを指している。彼は見識があった。

041

王国乡，林昭北大的同班同学，经济学家。

王国郷、北京大学で林昭のクラスメート、経済学者。

王国乡：我写了一篇文章《有头脑的人不要这样想》，我认为解放以后主要的问题就在个人崇拜上，由于个人崇拜，言论、思想、都不能有自由。

王国郷：私が「頭のいい人ならこうは考えない」を書いたのは、解放後の主たる問題は個人崇拝にあると考えたからだ。個人崇拝があるから、言論も思想も自由でありえない。

042

张元勋：象谭天荣写的《第一只毒草》《第二只毒草》《第三只毒草》《第四只毒草》《第五只毒草》《第六只毒草》，其实就是以毒草命名的大字报。

張元勳：譚天榮が書いた「第一毒草」「第二毒草」「第三毒草」「第四毒草」「第五毒草」「第六毒草」、毒草という名の壁新聞だ。

043

原新闻片资料与解说词：但也有少数资产阶级右派分子乘机向共产党的领导和社会主义制度进行进攻，6月8日，人民日报发表社论〈这是为什么〉（毛泽东的文章）一场大规模的反右派斗争在全国范围内展开。

当時のニュース映像とナレーション：しかし、少数のブルジョア階級右派分子がこの機に乗じて、共産党の指導者と社会主義を攻撃している。6月8日、『人民日報』は（毛沢東の）「これはなぜか」を発表、大規模な反右派闘争が全国的に展開された。

标语：将反右派斗争进行到底！

スローガン：反右派闘争をやり抜こう！

044

解説：在北大反右的后期，林昭已经知道了反右的内

幕，然而在批判张元勋的大会上，她却跳上桌子。

解説：北京大学の反右派運動の後期、林昭は反右派運動の内実を承知していたのに、張元勳の批判大会でテーブルに飛び乗った。

张元勋：围着我的都是中文系的党员，轮番讨伐我，声嘶力竭，语无论次。

張元勳：私を囲んでいたのは中文系の黨員で、順番に私を攻めたてた。声を限りに、支離滅裂な言葉で。

045

陈奉孝：林昭原来和张元勋的关系并不是很密切，虽然是《红楼》的，一开始她还批评过张元勋。好像不应该什么，但是到后来在批判右派时候，变成人身攻击……

陳奉孝：林昭はもともと張元勳と特に親しかったわけではない。「紅樓」のメンバーだったが、当初は彼を批判していた。大した関係ではなかったようだが、のちに右派批判のときに人身攻撃になったら……

046

张元勋：后来林昭就跳到桌子上讲话了。大家一听是个女孩子，站在桌子上。因为是夜间，在这个夜色朦胧中看不清林昭的脸。声音，林昭讲话的声音非常好听。林昭讲话是女中音，不是尖锐的，非常好听，再加上苏州话的普通话非常好听，用南方话讲就是很嗲。原来讨伐我的恶浪立即静止了，林昭上去讲话，她说：“今天晚上开的是什么会？是演讲会，还是斗争会？斗争会是谈不上的，因为今天不需要斗争，斗争谁？斗争张元勋吗？他有什么地方值得你们一斗，你们这些先生，刚才发言的我都认识，都是中文系的党员”。触犯他们的喉管子了，你看她胆大包天。张元勋：她话音还没讲完，后面就有一个外系的学生不知是谁：“你是谁？叫什么名字？”就这种无聊的东西。结果林昭站起来说：“你是谁？”黑夜里看不清。“你有什么资格问我，你是公（安）检（察院）法（院）吗？还是便衣密探？我告诉你吧，我可以告诉你，没关系，武松杀了人还写：杀人者打虎武松也。我林昭还没杀人呢，我告诉你，我姓林，双木林，

昭，刀在口上之日”。你看看，张口就是非常精彩的话。她把她的名字破掉了，刀在口上之日。她说：“今天刀在口上也好，刀在头上也好，不考虑了。既然来了，就不考虑刀在哪里”。

張元勳：そのあと林昭はテーブルに飛び乗って話した。みんながふと聞くと、女子が一人、テーブルの上に立っている。夜なので暗くてぼうっとしていて林昭の顔ははっきりしない。声、林昭が話す声はきれいなんだ。林昭の話はメゾソプラノで、かん高くなく、いい声だ。それに蘇州なまりで余計にいい、南の話し方でソフトだ。私を攻撃する怒鳴り声がピタリ止み、林昭の話が始まった。「今晚の集会は何の会議？ 講演会？ それとも批判会？ 批判会なら話にならない。今日は批判は必要ないから。誰を批判するの？ 張元勳を批判するの？ 彼のどこにあなた方が批判する価値なんてあるのか？ あなた方、さっき発言した人たちをみんな知っています。みんな中文系の黨員でしょう」。彼女の言葉は連中の喉元に触れた。どうだ、度胸のすわっていること！ 彼女の話した声が終わらないうちに、後から外国語系の学生の誰かが「おまえは誰だ？ 名前はなんていう？」と、くだらないことを聞いた。すると林昭は立って言った、「あなたこそ誰？」暗くてよく見えない、「あなたはという資格で私に質問するの？ 警察？ 検事？ 裁判官？ それとも私服の密偵？ 教えてあげる、教えなつて何でもない。武松は人を殺しても自分の名前を書いた、「人殺ししたのは虎をも打つ武松なり」と。わたし林昭はまだ人殺しはしてないけれど、教えてあげる。私は林、木が二本の林、昭は口の上に刀がある日」。どうだ、口を開けばすばらしい言葉だ。自分の名前をばらして、口の上に刀の日だと。「刀が口の上でもよいし、刀が頭の上でも、どうでもよい。ここに来たからには、刀がどこにあっても構わない」と彼女は言った。

047

标语：首都人民读了毛主席的报告，反右派斗争的热情更加高涨

スローガン：首都の人民は毛主席の報告を読んで反右派闘争への熱意はさらに高まった。

048

张玲：我当时只刚20出头，刚过完20岁的生日不久，对我最大的批评就是什么，你一个七八年的共青团员，你为什么七八天之内就倒向右派分子这方面。我当时非常非常惭愧，当时开除我团籍的时候，我没有别的，我只有眼泪，而且我哀求，希望党你们不要抛弃我。

張玲：私は当時20歳になったばかり、ちょうど20歳の誕生日直後だった。その私への最高にきつい批判はこうよ、「きみは7、8年も共産主義青年団員だったのに、なぜたった7、8日で右派分子の方へ行ったのか」。そのとき、本当に恥ずかしかった。自分の団員資格が剥奪されたとき、とにかく泣いて哀願した、「党のみなさん、どうか私を捨てないでください」と。

049

沈泽宜：当时我是相当苦闷的，斗争非常激烈

沈沢宜：そのころ私は相当に苦悩した、批判闘争がほんとうにひどかったから。

050

反右派斗争是关系国家存亡的斗争（人民日报）

反右派党争は国家の存亡に関わる闘争だ（人民日報）

人民代表警告右派不要自绝于人民

右派は自分から人民との間を絶たぬよう人民代表は警告。

051

张玲：在路上不敢打招呼，我跟右派同学要划清界线，我交过林昭的一张字条，就是交给组织上了，为什么呢？

问：那个字条上写的什么？

张玲：上头写的是，“此时无声胜有声”。我觉得这个条子本身这种情绪是不好的，而当时我已经把我所

有的日记，我从十二岁开始记日记，就是那么一大摞，都交给组织了。

張玲：道であいさつもできない。右派の友だちと一線を画すべく、私は林昭が書いたメモを組織にさしだした。なぜかという……

胡傑：そのメモにはなにが書いてあった？

張玲：そこには「この時、声無きは声有るにまされり」（白居易「琵琶行」の語）と書いてあった。このメモそのものの考えはよろしくないと思った。しかもそのころ私は自分の日記すべてを、12歳から始めた日記を、あんないっぱいあったのを、すべて組織に渡していた。

052

标语：粉碎广场小集团

スローガン：『広場』グループを粉碎せよ！

053

沈泽宜：党中央毛主席、中央检查组说要反右派了，那么也不必再坚持下去了，革命总有个涨潮落潮不能光只是一个头去撞。

（《我向人民请罪》——沈泽宜）

沈沢宜：党中央も毛主席も、中央検査組も反右派をやれという。それではがんばっても仕方ない。革命には盛衰があるものだ、たった一人ではやっていけない。

新聞記事：人民におわびします——沈沢宜。

054

王谨希：我们也是无能为力对她（林昭），其他的右派都是后来补上去的。对林昭划右派我们现在回想起来，好像班里没有开过她的批斗会似的。她已经就是这个状况了。

王謹希：私たちも林昭に何かしてやれる力はなかった。ほかの右派はつけたしだったんだ。林昭を右派にしたが、いまから思い出してみると、クラスで彼女への批判闘争会はしなかったようだ。彼女は早くにああいう状況になっていたんだ。

〔次号につづく〕